

生物質量の真実 第三卷
完全完成確定性原理

目次	1
表紙	2
目次	2
完全完成市場の形成	5
赤字をもたらす階層構造	6
誤差は損	8
不完全未完成市場	12
完全完成市場	16
愛を使う	21
ヒイロカネとお金	26
決済の再定義	30
ヒイロカネ決済	33
不健全不健康取引	38
場力と星の真実と時空の代謝システム	43
時空間考	44

全^{すべ}て総^{すべ}て凡^{すべ}て統^すべて

惑^{わく}星^{せい}の進^{しん}化^か

場^ば力^き共^き鳴^{めい}

量^り子^{よう}呼^こ吸^{きゅう}

腸^{ちよう}脳^{のう}発^は電^{つでん}

愛^{あい}の臨^{りん}界^{かい}相^{そう}転^{てん}移^い

宇^{うち}宙^{ゆう}と時^じ空^{くう}の進^{しん}化^かとは臨^{りん}界^{かい}相^{そう}転^{てん}移^い

腸^{ちよう}脳^{のう}発^は電^{つでん}と臨^{りん}界^{かい}相^{そう}転^{てん}移^い

後^{こう}記^き

87 77 70 69 66 62 57 53 48

完全完成市場の形成

赤字をもたらず階層構造

赤字を抱える公共のサービスは摩擦の矛盾が露出したものだ。赤字を出す医療や借金を増やすばかりの財政の原因は出費がかかるのに収入が少ないからだ。しかし極めて公共性が高い部門を赤字だからといってやめたら困る人が続出する。緊急医療や高度医療や妊娠や出産というような部門は必要だが赤字で事故が起きればすぐに訴えられる。

赤字がたくさんある。経費が高いからだ。個人ではお金が掛かりすぎて支払えない。だから税金が使われる。だから国や地方の財政が逼迫しその穴埋めのために借金が増えるのだ。

企業の売り上げにしても、お金を儲けるために働いても働いても、結局、上前をはねる一部の親会社がいい思いをする。皆に損させてその差を集める。多くの末端が損すればするほど大きな富ができる。それを元にサービスや政策を提供しても、提供されたサービスや政策に向いているものほど得して、向かないものは損をする。公平に同じ損でも同じ条件でも勝組と負組が生じるのだ。がんばったから勝組になれたのでは断じてない。どれほど精進しても流れが不利な者は追い風に乗った者に勝てないのだ。

この問題は地球人が不幸だから起こるのだ。つまり幸福とは健康とは富とは生物質量の自然発生であるべきだ。地球人が幸福でないというのは、ライフスタイルやワークスタイルが生物質量の自然発生ではないということだ。

状況を省みて言葉の再定義を内部触覚の記憶で生の実感できそうだと思おうが。人体は本来腸脳発電出来るのだから使わない手はないと思うが。時空間は量子呼吸

しているのだから零点振動の平均がマイナスとプラスの状態にある回路を作れば零点振動がプラスの回路からマイナスの回路に量子呼吸が起こりそうだと思うが。

収入が少なくて出費が多いというのは、典型的な森羅万象と誤差があるの見本である。医療や財政にお金がかかる。これはまさに誤差がある証拠だ。地球人が不幸である証拠である。完全完成成分が供給されているならば誤差が減っていくはずだ。そうすれば、より進化した分だけ富がふえたことになる。その差額の分だけ皆は得したのだ。そうすれば得した差額を皆で分配すれば皆が実在する無限に正直するだけ働けば、それだけで社会は、やつていける。

皆に損させてその上でサービスを提供する必要はないし、向き不向きに適応障害を生み出し少数の勝組と多くの負組を生み出すルールに基づいた競争など、本来、時空の代謝にない不可解な摩訶不思議など必要ない。

エントロピー増大の法則は自然に意図がないという物質である。だが実際は生物質量であり無限には無限に大完全大完成があり力は無限に成長する。当然、エントロピーは増大しても無限に吸収されてしまう。無限は無限なるが故に無限だ。エントロピーがどれほど増大しても無限に吸収される。だがそれは生物質量が自然発生すればである。

超能力も超科学も量子呼吸が起こせればの話であり、その機能のオンオフが使えないなら結局エントロピーの増大が起こる。

法律を決めそれに従わせる国家の政策は結局、法律に適合する人と不適合な人を生み出し、競争は少数の勝組と多くの負組という階層構造を生み出す。法律は場力の自由に干渉し、コントロールしようとする。摩擦で干渉を生み出し干渉で流れを支配しようとする。

更に協力的な摩擦で更に強力な干渉を生み出す。

摩擦こそが法律であり法律に沿うように干渉模様を作る。だがそれは場の意向が阻害される。つまり、摩擦の法律は皆に損させる。損させた分だけ組織の上前になる。その上前を支配する支配者に富や権力が集中する。そして向き不向きが格差を生み出し、適合した者と支配者は結託し、数少ない勝組と多くの負組に二極化する。

完全完成成分が吹出しエントロピーが吸収されるには場と運動する必要がある。それは万類万事に最適な最高の一手の選択である。だが法律は憲法を頂点とする階層構造であり合法違法を分離するフィルターのようなものだ。場力共鳴はあらゆるすべてであり合法とその例外違法もあり、さらに想定外もあるから場力共鳴が違法であつたらどうするのか。

誤差は損

場力共鳴は完全なオーダーメイドであり、一人一人違う。一人一人にその都度、合法や違法を決めていたら法律で管理できるはず無い。万民に良い政策は法律では為し得ない。万民に良い政策は生物質量の自然発生である。法律を再定義し直し最高法規を森羅万象とし最低法規を憲法にする。人類は常に一つしかない完全無欠と誤差がないだけを選挙して無数の有効な二手三手を不要排除するしかない

科学技術が発展し漫画や小説の中でしか出来なかつたようなことが出来るようになったが、その多くは完全完成成分を減少させエントロピーが蓄積される。完全完成成分を吹出させエントロピーを吸い込んでくれる場力共鳴がない。

一般にいう善悪の基準は完全無欠と誤差があるか無いかである。場力共鳴であれば人格は健全で悪者には成らない。超能力や超科学は本来悪用できない。天然自然は愛である。理想社会の中に住んでいながらぶち壊す。天国をぶつ壊し、地獄を作りあらゆるすべてを呪っている。

科学が発展し医療が進歩したがはたして健康に成ったのだろうか。便利になったがよいものが出回っているか。かならずしもそうではない。何故か。よいとは完全無欠と誤差がない最高の一手以外にない。だが肝心の最高の一手を必ず選択できるようには成っていない。有効な二手三手ばかりである。

法律の提供するサービスは摩擦で干渉を支配し都合のよい干渉模様を描く。干渉の流れに適合したものが勝組に。不適合なものが負組に成る。皆に損をさせてその上前をはねるやり方だからだ。負組が少なく万民が勝組に成るには共鳴による完全完成成分の増大しかない。共鳴であるならば皆が得するからだ。

皆が得する基準で善と悪の基準を考えれば、場力共鳴であるなら皆上手くいく基準であり善であることになる。天然自然のサイクルにのることである。文明や文化、法律などにも場に本体がある。腸脳発電の超能力や量子呼吸の超科学は、天然自然のご意向であり善であり合法であるはずだ。そこで実際に場力共鳴が起きているかどうかを調べれば善か悪か合法か違法かが分かる。

合法違法の摩擦こそ損害だ。法律が悪人を生み出すのだ。場に自由の原型があると考えないから自由を法律で管理することになる。宇宙文明では自由を管理する必要は、まったくない、有効な二手三手は必要ない、最高の一手が必要であるというのが常識だ。自由を

法律で管理することは共鳴を阻害し皆が損することになる。その損を上前としてピンハネし法律を動かす組織の資金源になる。お金が必要なのは摩擦を支えるためだ。

皆に損させるために、お金が必要なのだ。皆に得させるなら生物質量である。お金が、場力共鳴を生み出すか。産み出しやしない。お金が完全無欠と誤差がないということがあるか。無いではないか。支配するためには摩擦の楔を打ち込むしかない。その道具こそ、お金と法律である。本来、時空の構造は生物質量を生産し皆に得をさせる。そこには摩擦はなく、自分自身の原型に由来した自由があるだけだ。ここでは腸脳発電で健康で豊かな生活があるのだ。

同時空間空間に同じ物は一つしかない。同空間に一つしか無くても、時間が違えば違うものだし、同時空間にあっても空間が違えば別のものであり、同時空間空間に重なってあるのなら一つである。今この時所にある一つしかない場力共鳴。これは万民が得する回答が一個しかないということだ。どれほど選択肢があっても無駄である。最高の一手以外はスカだ。

損をさせるお金や法律は本来必要ない。お金や法律は時空間の本質からすれば、全くの無駄であり健康や幸福を阻害する因子である。人生から遠く離れていくだけだ。内部触覚の記憶は喜びを産み出さず、頭は悪くなり性格は荒んでいく。摩擦は百害あつて一利なしである。

健康の定義とは健康と誤差がないである。健康とは場の原型と誤差がないである。生命の定義も場に原型があつて原型の通りに誤差がないことである。法律による支配が、皆が得する万事良い政策を禁止し、皆が損をする諸悪の根源の格差を生み出す。皆が得して損

するものがない。これこそ善である。

定義には言葉の定義と行動の定義がある。まるまるとはなんぞやと問われれば、言葉の定義は「まるまるとは言葉だ」である。なんでもかんでも言葉である。言葉つて何だ。あらゆるすべてだ。あらゆるすべては実在する無限だ。無限は、時空間の背後にはさらなる時空間の背後がある。それがさらに無限に繰り返されることである。

言葉の定義とは言葉の原型になった場にある完全無欠と誤差がないことである。行動の定義では実際に何をするかである。行動自体は場に原型があるから場の行動と寸分違わぬことである。言葉にしる行動にしる場と誤差がないのは内部触覚の記憶である。

基本的に気や霊は場力の間を取り持つ。当然、場のご意向を優先する。従って、気や霊を大事にしていけば人生の幸福の指南役である。当然、超能力は場のご意向に従う。場と誤差がないように働く。それをねじ曲げるのは摩擦である。そうすると人格に不都合が生じる。

万民に良い政策は一個しかない。場力共鳴の一手である。場力共鳴であるということは今ここですべきことである。自分は今ここに一人しかない。手足や目はたくさんあるわけではない。右手は一つ、左手は一つである。当然、今ここに一人しかない自分は今ここ出来ることは一つしかない。

同時空間空間に同じものは一つしかない。同空間に一つしか無くても、時間が違えば違うものだし、同時空間にあつても空間が違えば別のものであり、同時空間空間に重なつてあるのなら一つである。今この時所にある一つしかない場力共鳴。万民が得する回答とは一個しかないということだ。どれほど選択肢があつても無駄である。最高の一手以外は、

皆スカだ。

あらゆるはすべてと連動し相互作用する。それは偶然や妥協の産物ではない。原型があるのだ。即ち原型と誤差がない最高の一手が実在する。それは共鳴だ。法律の提供するサービスはこの最高の一手に圧力をかけ損をさせ、その上前をはねる有効な二手三手しか、提供できない。お金は万民が得をする政策を鰹節にする通貨である。

法律やお金は多数の負組の損の上によつて得する少数の勝組という階層構造を齎す。これは摩擦だ。共鳴ではない。法之精神は弱肉強食の精神であり強い者勝ちの精神である。どれほど立派な理想を公約に掲げてても天佑神助が働かないから上手いかない。共鳴が働かないからだ。だから圧力団体が幅をきかす。勝組が蔓延るのだ。それは場の原型の通りに自由に生きる生活を認めないからだ。場の存在を認めないからだ。生物質量の自然発生を認めないからだ。

天然自然も文化文明も時間的に無限の過去から無限の未来に存在し今居る所から無限のかなたまで実在する。自分がいる惑星が在つて今ここで見ると力があつて場が無限のかなたまで広がっている。それは無限の過去から未来に続く。地球には文化文明もある。時空の生物質量の自然発生からすれば天然自然も文化文明も人類も、無限の過去から今このことと同じであり、無限のかなたまで今このことと同じである。

不完全未成市場

お金の持つ欠点は需要や供給を最適化しないことだ。お金で売り買いするのでは、何が

必要で何が不要か分からない。お金儲けでは収入と出費では収入のほうが多くなければならない。だが収入が出費より多い、つまり、売上が黒字であることが、常に必ず完全無欠であることを保証しない。

戦つて勝負を決することが正直であるとは限らない。受験勉強が果たして教育として正しい機会を生徒に供給しているだろうか。いいや、していない。そこにあるのは煩惱だ。多分正しいだろうという当て推量だ。完全無欠という言葉があるがそれが何か証明されていないからだ。

不完全未完成が地球を覆い不健全不健康が地球を覆う。不完全雇用や不完全供給は、なぜ生じるか。需要と供給の接点は常に変動する。その動きは、不完全未完成であろうか。需要と供給の動きを推論し予測できないだろう。だが完全無欠の需要や供給というものは存在するはずだ。雇用や賃金というものは最高の一手があるはずだ。

接点には二つある。需要と供給の接点と、売り手と買い手の接点の二つがある。二つの接点を使いより完全完成に向かう最高の一手に導くことは可能はずだ。だが現在のお金を使う方法では無数の選択肢の中からどれがより最高の一手か見当がつかないのだ。

なぜか。それは構造が階層構造になっているからだ。お金の売り買いの場では、商品に一番高い価格をつけた者が勝ち取る。高値をつける人ほど少なく高値をつける人は一人になり最高値をつけた人が落札する。受験戦争では試験で高得点を取った人から優先的に入学する。得点が低いと基本的に入学できない。

何故なら勝てば官軍、負ければ賊軍である弱肉強食のさいたるものだからだ。どこかに完全無欠の最高の一手であることを保証しているか。いいや、保証しとらん。そこ

には完全完成というものの理学的な構造というものが解明されていない。完全無欠の最高の一手とはこうだというものがない。

人心は悪化し殺伐とする。知恵者は進化とは偶然と妥協の産物であると説明し、メディアは怪談ばかり報道している。愚か者が正直者を食いつぶし、生難い世の中でまっ当に働くことは困難になりつつある。

それは戦つて勝負を決する競争市場では、同じように働いてもルールに適合したものはルールに適合できないものより結果的に必ず有利な立場に立ち、ルールが勝手に守つてくられて、ルールに適合できないものから富や権力を集めてくれる。適合できない者はルールにカツアゲされて負組になる。適合した者はルールが上前を集めてくれる。

完全雇用や完全供給や完全需要を提供しない現在の地球は未完成不完全市場である。それそのものを形成しているのは、ドラ息子や不良娘の家庭やお金儲けの職場や受験勉強の教室だ。未完成不完全市場そのものの学校崩壊が起こるのは、良心つまり、時空間免疫系が機能していないから不健全不健康になるからだ。

場力共鳴で詳細に定義を追求してより正確さを追求すると最高の一手、そのものしかない。有効な二手三手が百万手あつても、百万手は全部スカだ。不完全未完成市場ではスカと当たりを選別することが出来ない。場力共鳴の当たりと例外のスカを濾過できない。外れのスカを引いて倒産ということになる。株式市場では、当たりと外れの選別が出来ないから、不完全未完成市場の不備を突いて、ハゲタカが天然自然成分を食い物にする。そのために、不完全未完成市場では不健全不健康な取引が横行してしまう。

競い合うことで進歩したサービスは完全な一手に近い二手三手を提供する。だが最高の

一手は供給できない。確かに有効な手では在るが完全完成成分が増大することは無い。なぜなら天然自然の代謝系に乗らないからだ。つまり最高の一手は森羅万象との調和であり試行錯誤を繰り返し淘汰されて残ったものではないからだ。

試行錯誤の果てに淘汰されていく不完全未完成市場は、不健康不健全取引そのものだ。天然自然成分の支えの無い二手三手は人間が支えるしかないから人間性や体力を消耗していく。競争が進めば進むほど、人間がしなければならぬことが増え人間を蝕んでいく。働けば働くほど人間が支えなければならなくなっていく。

最高の一手だと天然自然が支えてくれるから、人間がさほど働かなくてもよい。最高の一手だと天然自然成分が増大するのならその増えた分を分かち合えば働かなくても富が手に入る。吹出す情報やエネルギーを取込み、吐出した老廃物を吸込んでくれるからだ。これは大きな差だ。働いて働いて不便より遊んで正直すれば世が立つほうがよい。

完全完成市場の提供するサービスと不完全未完成市場が提供するサービスはまったく違う。最高の一手と有効な二手三手はまったく違う。天然自然成分の増大と減少はまったく違う。不完全市場は二手三手の商品ばかりだ。最高の一手を生産できないからだ。善だけで臨界に達したサービスと不純物のあるサービスの差を知らない。

その違いを知らないから悪いこととしても知らん顔だ。完全完成市場では健全健康取引を求められる。不健全不健康取引は却下される。従って、不健全不健康取引をすれば途端に因果応報が働き最高の一手が停止する。完全完成市場に復帰するために誤差を修正するためにどれくらい苦労しなければならなくなる。悪は割に合わないと納得し、それが一罰百戒である。

森羅万象が決めた一手以外に共鳴は無い。戦いに勝つのでは最高の一手は実現しない。せいぜい有効な二手三手までだ。競争によるサービスの向上は働くものから体力を奪っていく。さらなるサービスの向上はますます天然自然成分を消費していく。働けば働くほど制度を維持するために疲弊していく。組織は摩擦であり共鳴では無いからだ。

完全完成市場

近代西洋合理主義は宇宙や人間の不完全性や不確定性を提唱した。絶対的な支配的である存在はない。すべては不完全で不確定という物質だというような科学の考え方を広め、死後の世界を説く宗教の考えさえも空想の産物と説いた。先人の賢者明哲が立ち上がった当時の時代と今の時代はよく似ている。いわば、近代西洋合理主義は当時の威張っていた権威とまったく同じだ。

当時宗教は、この世は不完全未完成で死後、完全完成した世に生まれ変わるためといって貢物をさせていた。当時の支配者は今の支配者と同じように最先端の知識で民を惑わし支配の道具に使っていた。近代西洋合理主義こそ、先人の最も恐れた、これだけはしてくださるなといった、そのものだ。

先人の賢者明哲が煩惱といったそのものが近代西洋合理主義である。近代西洋合理主義が先人の教えを批判しているが、それは先人を批判した当時の権威のやり方そのものだ。当時や今の権威がこの世や人の不完全未完成不確定をとくが、先人の賢者明哲は、宇宙や人類に不完全未完成不確定はない。完全完成確定だといったのだ。

従って当時や今の権威が支配の道具に使う最先端の知識が説く世は不完全性や不確定性の世になるが、いつの時代でも賢者明哲が使う最先端の知識が説く世は完全完成確定性の世になる。当時や今も権威が賢者明哲を押さえ込んでいる。この世は不完全未完成であるということになっていて、不健全不健康な視線で世の中を見ることになる。当然、当時も今も賢者明哲がといった最高の一手は権威に否定される。莫大なお金を持ち摩天楼に住んでいる勝組が天下万民のために偉大な貢献をしたから、勝組となったように見えるか。見えないだろう。確かに立派な御方もいます。しかし勝組になったことが社会的に正しいことをしたと証明する社会制度ではない。第一偉大な正直をなして勝組になったと証明され、しかも勝組が負組より圧倒的に多数になるようでない地球は安定しないだろう。

あらゆるすべてが森羅万象と一体化する必要がある場力共鳴は一手しかない。その一手を連続する。完全完成健全健康市場があり、その向こうにはより成熟した大完全大完成、大健全大健康市場がある。不完全未完成不健全不健康市場から完全完成健全健康市場へ、さらに大完全大完成大健全大健康市場に向かう経済成長が成り立つ。

未完成不完全市場は無限に開かれていない有限の閉鎖市場である。それは完全完成成分を量子呼吸することがない。三五教は地球の閉鎖市場を無限に開放し、全地球に宇宙市場への開放を訴えるべきだ。日本市場が完全完成市場を形成し、地球市場も完全完成市場へ移行すべきだ。日本が完全完成市場のほうが旨味が在ることを証明すれば地球全体に広まる。

代謝システムにない有効な二手三手はそれを実現するために人間が支えなくてはいけない

い。代謝システムに乗るなら追い風になり、森羅万象が支えてくれるから人類は楽に出来る。不完全未成市場は人間が形成しない限り天然自然には存在しない。人類が豊かさを求め不完全未成市場でサービスを競争し合っても、自分で自分の仕事を増やすだけだ。労働の短縮は改善によってもたらされない。

不完全未成市場では戦争原理が平和原理を駆逐するが、完全完成市場では平和原理が戦争原理を駆逐する。不完全未成市場は有限の閉鎖系の中で、エントロピーが増大する不完全性原理や不確定性原理のお金市場だ。

お金を取引する取引市場はお金を持つこの欠点ゆえに無数の選択肢に惑わされ、最高の一手を見出せない。そこで最もな理由を付けて来るハゲタカの闇討ちに後手に回る。つまり天然自然成分が減ろうが不健全不健康取引でも構わないことになる。株を買い漁り価格を吊り上げ高値で売り抜ける手法は戦争原理そのものだ。

当時も今も二つの接点をめぐり取引市場は百花繚乱するばかりである。それは、無数の可能性があるということだが權威にしてみれば万民に有利という決定はなきに等しい。なんでもかんでもよい結果になる最高の一手なんか選択できるものかと權威は考えている。

何故なら權威は秩序を決める。つまり戒律を定め適合不適合を決める。そうするとある人には有利でも別の人には不利になる。そうすると競争が起こり結果的に少数の勝組が生まれる。戦いを保証する權威は完全な階層構造であって、頂点は一つであらねばならないからだ。

万民に不利という政策はいらないし、少数に有利で多数にふりという政策もいらない。勝組が多くて負組が少ないという政策があるはずで、これこそ必要だ。ところが多くの人

に有利で不利が少ないという秩序があるはずだが、権威はそれを否定する。何故ならその選択肢は権威が否定したヒヒロカネであるからだ。

近代西洋科学ではヒヒロカネを提供できない。二つの接点を勝組が多くて負組が少ないところと導く手法を導き出せない。戦うからだ。戦うからには、勝者は一人であるからだ。競わせることで権威を保つ権威は、勝ったんだから仕切るのは当然という行動をとる。それが勝組が多くて負組が少ない政策の邪魔だ。世の中を不安定にする原因だ。

当時も今も民は階層構造化した権威に疑問を感じていたが、その中で真相に気が付いた賢者明哲が奮起したが、賢者明哲の意見は当時も今も正しく理解されない。民はうすうす感ずいているが、階層構造化した権威の報復や世間に後ろ指差され噂されることを恐れ、沈黙している。

このことは当時も今も変わらない。そこで当時も今も賢者明哲は未来に託し活動して、預言や奇跡を起こし啓蒙した。当然、賢者明哲の真意に気づけば我我も賢者明哲出来る。それが多くに有利で少数に不利という政策を可能にする。勝組が多くて負組が少ないという政策だ。

完全完成市場に移行するにはそう言った森羅万象との誤差である取引を排除する必要がある。それは社会全体が完全完成確定性社会に移行する必要がある。正直を追求する限り健全健康取引がより良い完全完成市場を求め成長していく完全完成市場こそが平和原理である。

サービスの向上と言っても無数の選択肢の中から有効な二手三手を提供しているのではありません。駄目だ。最高の一手は今の企業や学校や役所にも家庭でも提供できない。なぜか、それは

八尋殿とヒヒロカネと霊と座がないからだ。

ここで先史の英知、縄文時代や天祥地瑞の宇宙文明が醸される。生物質量の自然発生は丁度細胞膜が栄養と老废物を交換するように、量子が時空間に濾過されることである。それは霊と座や八尋殿やヒヒロカネを経由して行われる。即ち、地球にもアルケミーやテオクラシーがある。先人たちが築いてきた八尋殿があるのだ。

人類の卑近な営みと言えどもすべては時空間と量子から出来ている。そこで時空と量子が完全無欠と誤差がない共鳴を起こせばよい。最高の一手とは場力共鳴そのものでありそこに時空と量子は集約していく。当然、共鳴状態の時空と量子が自由に動けば最高の一手になる。天然自然には時空を超えた量子の循環系があり、人類はそのシステムのお手伝いをしていれば報酬が在り生きていける。人類の卑近な営みが時空を超えた量子の循環系であればよい。

時空を超えた量子の循環系と人類の卑近な営みを変換するシステムがあればよい。地球では量子の電子や光子で動くものがほとんどだ。当然変換装置も量子で動く。取り分けお金は銀行を経由し株は証券会社を経由している。そこではコンピュータとネットワークが活躍する。その中は量子の信号である。その量子を量子呼吸させるシステムが出来るはずだ。

どのように変換するのか。実は変換しているのは天然自然である。天然自然は天然自然が決める。あらゆるすべてのあらゆるすべての天然自然である。天然自然は天然自然である。無限が無限足りえる装置ができれば無限が介入してくる。それが変換装置である。人間が蒔蓄しなくても森羅万象が何でもしてくれる。

我（われ）我（われ）の宇宙（うちゅう）で実際に（じっさい）実現（じっげん）するのは、天然（てんねん）自然（しぜん）の代謝（たいしや）システムに（の）乗（の）っているものだけだ。現実（げんじつ）にある物（もの）は森羅（しんら）万象（ばんしょう）と誤差（ごさ）がないだけである。天然（てんねん）自然（しぜん）は天然（てんねん）自然（しぜん）を天然（てんねん）自然（しぜん）でできる天然（てんねん）自然（しぜん）の天然（てんねん）自然（しぜん）による天然（てんねん）自然（しぜん）のための天然（てんねん）自然（しぜん）である。それは完全（かんぜん）完成（むく）確定（けつてい）性（せい）原理（りんり）である天然（てんねん）自然（しぜん）の代謝（たいしや）システムに市場（じちや）取引（とりひき）を乗（の）せることでしか実現（じっげん）しない。

愛（あい）を使う（つか）

人（じん）為（い）で作（さ）く為（い）的に何（なん）でも作（つく）り上（あ）げられるというこは（こ）はない。共鳴（きやうめい）がない、つまり場（ば）に物（もの）を人（じん）為（い）的に作（さ）く為（い）的に作（つく）ることを文明（ぶんめい）文化（ぶんか）の進化（しんか）というのは間違（まちが）いで、それは文明（ぶんめい）文化（ぶんか）の退化（たいか）である。なぜなら場（ば）の完全（かんぜん）完成（むく）成分（せいぶん）の生物（せいぶつ）質量（しりやうりやう）以外（いがい）に力（ちから）を成長（せいちやう）させる栄養（えいよう）はないからだ。生物（せいぶつ）質量（しりやうりやう）が失（う）われた霊（れい）主（しゅ）体（たい）従（じゆう）から山河（さんか）草木（そうもく）や縄（じゆう）文（もん）終（しゆう）焉（えん）以降（いこう）、人類（じんるい）は退化（たいか）した。

場（ば）力（ちから）共鳴（きやうめい）の豊（ゆたか）かさ（を）自覚（じかく）出来（でき）ないというこは（こ）、完全（かんぜん）完成（むく）成分（せいぶん）を摂（せつ）取（しよ）していないから、内部（ないぶ）触覚（しよくかく）の記憶（きおく）が作用（きよう）していない。そうすると、人生（じんせい）や事象（じしやう）の一連（いちれん）の背後（はいご）にある場（ば）の意向（いこう）を内部（ないぶ）触覚（しよくかく）の記憶（きおく）が教（おし）えてくれない。

場（ば）力（ちから）と時空（じくう）の構造（こうぞう）は場（ば）から力（ちから）に（き）て場（ば）に帰（かえ）るである。力（ちから）では確（たし）かにいろいろ出（で）来る。しかし選択（せんたく）肢（し）があるの（だ）が、場（ば）と誤差（ごさ）がない以外（いがい）に意味（いみ）はない。それは内部（ないぶ）触覚（しよくかく）で確（たし）かめる以外（いがい）にない。しかし腸脳（ちやうのう）発電（はつでん）が働（はたら）いていないと内部（ないぶ）触覚（しよくかく）の記憶（きおく）は機能（きんのう）しない。ああそうかと納得（なっとく）い（か）ない。分（わ）からないから自覚（じかく）出来（でき）ないから完全（かんぜん）無欠（むけつ）が分（わ）からない。それが無数（むすう）の選択（せんたく）肢（し）から完全（かんぜん）無欠（むけつ）の一手（いって）を見（み）つけ出（だ）せない理由（りゆう）だ。

無数（むすう）の選択（せんたく）肢（し）から完全（かんぜん）無欠（むけつ）の一手（いって）をいとも容易（たやす）く見（み）つけ出（だ）せるなら、それは超能力（ちやうのうりき）であ

り超科学だ。そのためには場力共鳴をなせるかだ。腸脳発電の時、内部触覚の記憶が働いている。内部触覚の記憶がもたらす因果律こそ、完全無欠と誤差がないである。

内部触覚の記憶が因果律を醸す。醸された内部触覚の記憶こそ、森羅万象の意向であり天然自然の完全完成成分である。内部触覚の記憶の実感が伴わないなら、腸脳発電ではない。通常エネルギーがプラスの時は吹出しているだけで吸込んでいない。ところが条件がそろえばマイナスの状態になる。二つ揃うと呼吸になる。通常腸はプラスであるが条件が揃うと脳がマイナスになる。そうすると腸から脳に量子の循環が起る。量子呼吸を燃料に神経が発電すると内部触覚の記憶が働くのだ。

当然、場がないなら量子呼吸は起きない。場に原型があるというのが量子呼吸の前提である。内部触覚で探つて場がないなら記憶が再現しない。因果律は掴めない。人間の判断で良くても上手くいくとは限らない。法律で合法的に政策を決めても結局、人間が支える羽目に陥り民に尻ぬぐいをさせることになる。人間が理想社会を作るには場と誤差がない以外にない。

場力共鳴は基本的に正直にしか使えない。生物質量であるならば正直であるといえる。宇宙文明には犯罪がない。何故なら正直であるからだ。法律で合法違法を決めたりトップが政策を決めるのでは、必ずある人には有利でも、別の人からすれば不利になる。すべてに上手い政策をいつも決定できない。それが向き不向きを生み格差を生み出す。それは、完全無欠と誤差があるからだ。

宇宙には場という原型があり、本来の設計図通りに生きるなら完全無欠である。ところが、場を認めないし場に気がつかない。すべては偶然と妥協の産物というような意識を持

つ者は、内部触覚の記憶が働いていない。問題はそこだ。誰にでも内部触覚はあるのだが、場力共鳴が機能していないから内部触覚の記憶が円滑でない。

宗教家や科学者が超能力や超科学を使えない理由も、今時の人民が障子一枚まならぬ理由もここだ。心霊や物質という言葉の持つ本質的な間違いに気がつかず迷路の中を彷徨し、煩惱と化しているからだ。内部触覚の記憶が働くように言葉と行動を変えるだけで、超能力や超科学は誰にでも使えるようになる。

政治家や酋長や経営者が万民万事によい政策を模索しても見つけれないのは力しか見ていないからだ。言葉の本質に気がつかないから心霊や物質を超えて生物質量に気がつかないからだ。言葉の本質に気がつかないから心霊界や物質界を超えて場力と異星の真実に気がつかないからだ。

気や経絡秘孔や山や丹や神仙道や霊や座や八尋殿やヒビロカネやカタカムナというのは場力共鳴量子呼吸腸脳発電である。生物質量の自然発生という原理で内部触覚の記憶が働けば合点がいくのだ。記憶が天然自然の意向を示唆してくれると「生物質量はこうすれば自然発生するのか」とか「今、丁度、生物質量が自然発生しているな」とか「多分、天然自然はこう動いていくだろうな」とかが見えてくる。

ということば、天然自然が場の意向であるならば、自分も場の意向を背負って生きたら森羅万象の大義を掲げ生きることになる。天然自然と誤差がない生活なら天佑神助が働くはずだ。それならばいつでも人生は腸脳発電の追い風に乗り、豊かに生活できるはずだ。正直であるから宇宙文明には、犯罪がないのだ。地球も宇宙文明を構築すべきだ。いくら有効な二手三手を模索しても結局は完全無欠と誤差がないの場力共鳴以外にあらゆるすべ

てに正しい政策はない。

それが天然自然と文化文明の等価原理である。人間が文明を作るのではない。もともと文明文化も天然自然も人間も人生も触覚も意識も喜びも悲しみも場にある原型が現れたのだ。人間が作っているのではない。生物質量が自然発生し知性が起こり考える作用として発現したのだ。それを人類は万物の霊長といっているに過ぎない。その証拠に場のお世話になつても場のお世話が出来ないではないか。

地球のお偉い先生がいうように、進化とは自然の妥協の産物であるという定義のどこが自然を超えたというかいね。自分を支える自分自身さえ見えないのかね。内部触覚の記憶を解析したことがないのかね。内部触覚の記憶というのは自然の意図が見えることだ。フールド フォースを見えないか。

気とか霊、つまり量子呼吸が起こると時空を超えた情報やエネルギーの循環や交換が起こる。代謝が円滑なら気持ちはいい。気分爽快だ。それだけではない。無限と共鳴すれば代謝が時間空間的に無限まで広がるから、代謝は無限と融合していく。すると今まで力に制限されていた代謝の能力は力より進んだ場の代謝を取入れて拡張するようになる。これは力を超えて能力が場に広がっていくことだ。

力を超えた能力は超能力であるがそれはより高位にある場から吹出し、場に吸込まれる能力のことで腸脳発電の必然である。霊とか気や座や経絡秘孔はこのことをいうのだ。腸から吹出した量子は脳から吸込まれ、その作用が腸と脳にある神経細胞を発電素子に変える。腸から脳に達する量子呼吸は神経発電する栄養であり燃料である。

新陳代謝によって生まれる神経性化学物質がニューロンで反応し連鎖反応を起こしそれ

が意識になる。ところが何故精神性物質の反応で思考できるのかが分かっていない。単に信号の伝達だけでは思考をしない。偶然や妥協ではエントロピーの増大であるが、熱力学の第二法則のように混沌に向う偶然や妥協で、果たして自然界が進化し人間の知性が生まれたというのはいかなるものか。実在する有限の限界であるように思える。

存在の定義を有限から無限に再定義し直せば生物質量の自然発生に成ると思うが。実在の定義を有限から無限に変更しても問題はないと思うが。いかなるものか。文明や文化が発展していく過程でこのような拡張をもたらす再定義はいくつもある。フェラデーやマクスウェルやフレミングたちの活躍した時代のこのように電気と磁気が統合され電磁力になったりするように、原子が波動か粒子かでもめて粒子性と波動性と相互作用を併せ持つということになった経緯のようになだ。

平行線の公理から生じた不完全性原理や量子論の不確定性原理や相対論は、いわば科学だけでなく宗教や哲学的な命題であり、政治軍事経済にも文明や文化にも深遠な命題である。だがその背景に実在する有限の限界が潜んでいる。それが足かせに成っているから、地球が閉ざされている理由だ。

地球が開国しない本当の理由は、地球人が不幸だからだ。地球人は胸を張って幸せと言えない切れないからだ。宇宙文明の原理、生物質量の自然発生は内部触覚の記憶であるが、それは恋愛感情に弾けることである。生命の喜びである。お堂で座禅を組んで精神統一することが思考瞑想ではない。生命幾何学の発動にしてホルモンが生産され、蝶のように舞い血流が安定し細胞が癒されることである。

ヒヒイロカネとお金

場の生活を考えてみよう。場力の量子の出入りが万物を幸せにする。そこで出入りと言えど、売買である。そこで使われるお金。それは場力共鳴として出て来ない。だが量子の流れを決済の手段に使う事は可能である。このとき、完全なる需要と供給が出来る。生産と消費が一体化する。お金は多くの貧者と少数の富豪をもたらず。そこでお金の代わりに生物質量を使う。決済の手段に生物質量を使うと経済を場力の元に最適化出来る。これはお金にはない機能だ。

お金は少数の持てる者と多数の持たざる者を生みだし多数の敗者が何とかして這い上がり少数の勝者の地位に付こうとする下克上になる。だが生物質量にはそれが無い。経済を完全無欠に導く事になる。人類の営みは理想社会へと導かれる。戦争も貧困も飢餓もない世の中。場力共鳴腸脳発電量子呼吸に有害な取引は成り立たないようになる。場力共鳴であるならなんでもよい。どんな取引でも成り立つ。生産も流通も消費もすべて場力量子の出入りで成り立つようになる。

場力の哲理が広まると決済の手段にも使われる。お金を払えば買えるから場力がないと買えないに成る。量子の流れに乗るのか乗らないのかが決済になる。金儲けがなくなる。プレミア価格をねらう転売目的の売買や犯罪のお金は場力がない。従って決済出来ない。法律で合法違法を定めても必ず抜け道はある。では何が悪で何が善か。その判断の基準は森羅万象と誤差があるかないかである。ただ、場力決済だと決済が出来れば偉大なる公共の福祉であり崇高な基本的人権の保障である。

場力共鳴を起すとは何が出来るか。動植鉱物だ。元素の周期律表の金属元素に場力は働きかける。生物質量も動植鉱物も場力共鳴量子呼吸腸脳発電金属元素だ。これは生き物だからだ。この高位地化した金属元素は場力から情報やエネルギーの供給を受け自ら進化する。当然。本来の有り様を求め自ら元素転換もする。その自然界の元素転換は、知性生命精神生物質量を動植鉱物として自然発生させ、知性生命精神生物質量の自然発生は場力共鳴元素転換動植鉱物の自然発生である。

この動植鉱物を検出するときが場力共鳴だ。拡大しても縮小しても出てくる入子構造の場力共鳴の密度を上げていくとやがて臨界に達し発振する時、自然界に知性が吹出してくる。丁度、ヘモグロビンのように力を巡り場力の栄養の酸素を届け老廃物の二酸化炭素を回収する生物質量動植鉱物。

人類が自然界と付き合う為には人類が生物質量動植鉱物の蓄積を富の蓄積と見なさねばならない。富をはかる基準を天然成分の蓄積か散財かで見ると。人類が今まで自然のサイクルを見つけたられなかったから富の基準を自然の散財にしてもその弊害に気が付かない。

文明の力で知性生命精神生物質量を作るとは場力共鳴で元素転換を起し動植鉱物を量産出来る。人類の英知を総動員し命や心を洗う。環境を美化出来る。海や山も人類が、動植鉱物の大増産に乗り出すのを待っている。人類は今まで階層構造に惑わされ上が決めた善悪の基準に煩惱してきた。今、迷いから目覚め、過去から未来、変わる事のない誰もが分かる恒久的な基準の確立が出来た。今、迷いから目覚め、過去から未来、変わる事のない誰もが

善悪の基準はない。ただそれが真善美愛かそうでないかしか分からない。そこで便宜上の場力決済を善とするのだ。それが善であるかは分からない。保証出来ないがしかし偉大

な奇跡だ。そこでつねに省みる場力共鳴決済というような考えに辿り着く。決済が降りても満足せずに更なる高みを目ざし飛翔する。

塵も積もれば山となる。その繰り返し。社会制度一般が場力共鳴に向かい、人類は富を自然と分かち合い共存繁栄する。そこには何の不幸もなくただ喜びが溢れ草木は歌い、蝶は野を飛び回り、動物は草の上に横たわり欠伸で一日を終える。

それが本来の姿なんだが、そこに立ちはだかる、組織を維持する為に天然を食い潰す、権力闘争の壁。権力者は組織を維持する為に常に戦いを挑み、勝利して組織を拡大してきた。そのために常に強大な敵を必要とし、それに打ち勝つ事で権威を保つ。自然を支配し人間に都合の良いように改造する事で権威を高めてきた。

そして今、権力闘争を行うものたちは地球の支配を完全にする為に森羅万象に大きな戦いを挑もうとしている。天然に宣戦布告しても所詮勝てないから権力闘争を行なったものは自分たちの支配が崩壊するくらいなら全部滅ぼしてしまおうとするだろう。

法律は階層構造を生み、勝組と負組を生み出す。勝ち残る為に戦争が生じ、法律は勝利を得る事を認めそれが権力を生み、法律同士の対立は大きな戦乱を生み、それに勝利する事で地球を支配する階層構造を生み出す。今、人民の人民による人民の為に法律や科学はその矛先を森羅万象に向け、天の理に戦いを挑む。

だが天然自然は人類万類に幸せをもたらすと知るべきだ。自然も人類同士も動植鉱物さえ蓄積してくれたら人類が何しまくつても仲良くやっていけるのだ。人類が人類同士を裁いたり支配出来ない、する必要もない。それは人類が天然の一部であり調和であり、戦乱は場力共鳴を見失ったから生じた誤解だ。存在しない権力を維持する為に人類は無駄死し

てきた。我慢に我慢をして潰されようとしている。そのことが支配階級に分かるからだ。宇宙文明ではそういった人人がのさばらないように出来ている。支配階級が生じれば必ずこのような災いが起こるからだ。だから知識を正しく使うことに気を付ける。人類が正しく使えないのに知識を増大させればこのようなことになるからだ。異星人の援助を受けているのに場力と星の真相を究められないのは誤っているのだ。誤った知識が一人歩きしないような社会を作るべきだ。

のさばらせないためには生物質量動植鉱物のヒヒイロカネ決済しかない。決済の循環が力の領域しかないから奪い合いが起こる。場の完全が適所適材すればいいのだ。指南役がないお金では試行錯誤を繰り返し無駄が増えるばかりだ。お金の欠点が組織の欠点だ。これは原理がどちらかにしかないということだ。お金とヒヒイロカネは両立しない。どちらかを選択しなければならぬ時が来る。それが今だ。

地球は大きくお金に傾いた。森羅万象は試行錯誤を禁止していない。不完全自体は完全に完成した時の肥やしになるからだ。嘘から出た誠自体はこのときに真の意味で生かされる。広大な領域の嘘が広大な誠にかえるからだ。

お金自体は完全であることが原理的に成り立たないがそれは決済の手段であって絶対にお金でなければならぬということではない。生物質量を決済の手段に出来るからヒヒイロカネに移行すれば完全が成り立つ嘘から出た誠に社会の原理が移行するということだ。原理がお金のお金儲けで在ったが原理を仮名に三顧の礼を尽くすヒヒイロカネの仮名詣でにすればすべて解決するのだ。知識を正しく使えるようになるまで資源を掘り出すなどという口伝から、今までを試行錯誤の時代とし正しく使えるようになってその正しく使えな

かつた知識が正しく使える世になった。それならば場力や星星の人人にも説明がつく。考
え方をお金の循環からヒヒロカネの循環に移行するだけだ。

決済の再定義

ヒヒロカネの場力共鳴の特性は金属元素としてのヒヒロカネとしてだけでなく概念
としてのヒヒロカネにも当てはまる。有価証券としての株やそれを電子化した物や電子
マネーにも当てはまる。決済の手段に電子化されたヒヒロカネを用いることは出来る。
損させて上前をはねるやり方は禁止される。経済に通貨より優れた決済の手段がないか
ら有史以降、お金が使われてきたがヒヒロカネにその地位を明け渡す。場力共鳴検波器
の開発によつてお金を持つていれば買えるという従来の売買からヒヒロカネであること
が売買の条件になる。何でも買えるには買うことが正直であるという証明が必要になる。
場力共鳴正直検波器で承認されることである。場の栄養を取入れて力の老廃物を排出して
いることであることが売買の基本となる。

高貴な御方が資源を正しく使えるようになるまで取り出すなど言つたのは天然自然成分
を消費させるお金の戦争原理は自然に損をさせその上前をはねる。やがて人間同士で損を
させ、その上前をはねる勝組が現われ格差が生じる。それが下克上を生み出し騒乱となり
自滅するから資本の弱肉強食を必要としない平和原理のヒヒロカネを生み出す場の栄養
を取入れて、力の老廃物を送るエリア88や正しい性道徳をしなさいといったのだ。
戦つて栄光を掴むのが肝心という人やお金儲けを推奨する人を、見て皆に得させて感謝

されていきますか、いけません。勝組は損させて上前をはねているだけではないか。相対的に場は完全であり力は相対的に不完全であるから力に未来永劫続く成長をもたらす平和原理を戦争原理を使う限り証明できない。戦争原理が平和原理を証明できないことを戦争原理を鼓舞する人は知っていて、平和を求める者に戦争原理を使わせることで冷徹に勝利を目論む。善人であれば戦争原理は好まない。従って戦争原理を好む者は善人に損させて上前をはねるようになる。

争つて勝つことを便利という者は所詮平和愛好家より冷徹さが違う。私利私欲で損させても金儲けの当然という者は場力共鳴の原理には辿り着かない。なぜなら平和原理だからだ。そこが戦争原理を鼓舞する者の味噌だ。戦争原理を鼓舞する者にとつて平和原理を好むものほど、かつあげしやすき者はない。社会的合意で戦争原理を認めさせればしめたもの。絶間ない軋轢に平和原理を好むものは敗れていく。相手に損をさせその上前をはね、容赦なく叩き潰すものが勝ち残る。戦いだからそれが当然というのが戦争原理。

多くの人は平和原理を好み戦争原理を好む者は少ない。戦争原理を好む者は社会の中で徐徐に平和原理を好む者から富を奪い蓄財していく。やがて少数の好戦家が戦争原理を認めさせ我田引水に明け暮れていく。社会が戦争原理を認めれば社会には天佑神助は働かない。場力共鳴が分からなくなる。

天佑神助が働かないようにしてしまえば量子呼吸が起こらないから現状維持が減るだけだから富を奪いあうしかない。奪い合いなら好戦家の戦争原理を好む者の独断上だ。だから戦争原理では場力共鳴がわからない。知性生命精神生物質量の自然発生の法則を認めない。場力と星から星への宇宙文明を認めないのだ。

競争が互いに切磋琢磨して発展するというのは間違いだ。切磋琢磨は完全無欠と誤差が無いように向かう時の過程に過ぎない。誤差がないならば切磋琢磨は必ずしも必要ない。本来、完全に向かうときダイナミックな活動が起こる。競争が活動を飛躍させるのではない。

平和原理と戦争原理を混ぜると戦争原理が平和原理を食い物にして上前をはねるようになる。かといって、好戦家を排除するわけにも行かない。社会が戦争原理を排除できねば高貴なおかたがいった全滅の危機がやってくる。社会全体が平和原理か戦争原理かを選択しなければならぬ。戦争原理なら全滅する。平和原理なら宇宙文明に進化する。

ではどうするのか。宇宙文明を否定する理由は生物質量の自然発生の法則を認めないからだ。皆が得するにはヒイロカネの生産が必要だ。それと同時に決済の手段としてのヒイロカネが必要だ。

戦争原理を持ち出す人は平和原理なんてできっこない、ヒイロカネが出来るはずないと高を括っている。それなら戦争原理を持ち出す人に対するには社会全体がヒイロカネ決済の平和原理を認めてしまえば戦争原理に食い物にされずにすむ。丁度電子マネーのようないもので決済を量子の働きですれば量子が場力共鳴量子呼吸すれば承認する、しないなら不可能にしてしまえば皆が得するから承認、皆が損するから不可能ということになる。

証券市場で株を買い漁り大株主の威勢で注文をつけ株を高値で売り抜けるようなことが成り立つ証券市場は不完全未完成市場の典型である。証券市場が完全完成成分を生産し、消費しない取引市場が株式市場の完全完成市場である。

取引市場は本来完全完成市場であるべきだ。完全完成市場を定義すると完全無欠と誤差

がないである。それは場力共鳴であるから、量子呼吸が起こり、腸脳発電を取り出せる。不完全未成市場は不健全不健康市場である。不完全未成不健康不健全市場の王様である証券市場と為替市場に場力共鳴の秩序を持ち込めば効果は絶大だろう。

競争がサービスを進歩させるのは試行錯誤が結果的に場力共鳴の一手に近づいて行くからだ。さまざまな経験が結果的に森羅万象と誤差が無い方向を選択させるからだ。だつたら初めから完全無欠の最高の一手だけを選択すれば競争はいらない。競争は最高の一手に到る過程に過ぎない。争わなくても最高の一手だけあればよい。

完全完成完全無欠の最高の一手は平和原理によりてもたらされ、戦争原理では選択できない。場力摩擦の戦争原理は場力共鳴ではないからだ、場力摩擦は場力共鳴を排除する。従つて競わせて良いほうを選ぶ方法は役に立たない。完全無欠を選択するのは調和原理の場力共鳴しかないからだ。

ヒヒイロカネ決済

戦争原理と平和原理を対等に扱うと戦争原理を好む者が平和原理を愛する者を食べる物にしてしまう。かといつて好戦家を抑えれば人権侵害だ、差別だといつてくる。だから資源を正しく使えるように、皆が得して感謝しあえる場力共鳴の八尋殿とヒヒイロカネを作り戦争原理を皆がコントロール出来るようになりなさいと高貴な御方は言つたのだ。戦つて勝敗を決して天然自然成分が増大するのなら、今ごろ地球は豊かに恵まれているだろう。実際は貧しくなっているのが現状だ。争いが場力共鳴で無い証拠だ。

場力における共鳴の機会は皆平等である。依怙、眞實は無い。当然管理したり運営する者があることは無い。仮に自分が元締めであると称し、支配に乗り出せば場力共鳴は摩擦のために不協和音を生じノイズが走り量子呼吸の息の根をとめる。そこで自分に大成奉還することと生じる摩擦の不協和音を取り除くという政策を掲げる。それは摩擦を生み出して張本人だから出来る。だから自分に元締めの権能があるということになる。だが平等な場力共鳴を管理する大義は誰が承認した。民衆は誰も承認していない。

権力というものは正当性がない。正当性があると認めさせているに過ぎない。摩擦が生じ不協和音が生じると得が生じない。完全完成成分が不完全未完成成分になつてしまう。そうすると損になる。管理者によつて多くの者は大きな損を強制される。時空は皆得するように出来ている。それは平等で公平であるということだ。つまり管理しようとする特定の個人や組織のその支配のために多くの平和を愛するものが損を強いられている。管理しようとする特定の個人や組織が我等をどう扱っている。

奴らの当て馬にされ使役されるだけだ。管理しようとする特定の個人や組織は皆に得させようとしなない。損させその上前をはね我田引水しているだけ。平和原理は完全完成成分を取り入れ皆に得を生み出す。成分の中にも良い悪いは必ずある。売買の中にも誤差と完全の成分がある。

株を公開している企業は基本的に投資が必要で投機はいらぬ。しかし、投機でも投資と言つてくる場合がある。株の売買では投機か投資か区別がつかないからだ。株の売買で平和原理を愛する者は大体投資を目的に考える。だが株の売買は大体、お金儲けが目的で企業にとつて迷惑な売買が横行している。

確かに株が上がるがそれは投機のためであつて実経済とかけ離れた売買を起こし実際の企業から体力を奪い損させて上前をはねる売買が横行している。それがかつて大不況を起こし世界大戦をおこしたのにまだ愚か者が愚行をしている。

それはお金の売買が得か損か区別がつかないことに起因している。投機か投資か区別がつけば投機なら認めない投資なら認めるということが出来る。その区別は皆が損か得かである。皆が得して御礼をもらうか皆に損させて上前をはねるかである。

完全無欠と誤差がないかそれとも誤差であるかである。場力共鳴か場力摩擦かである。場力共鳴なら腸脳発電量子呼吸が起こるから量子的な装置で検波できることになる。そうならば投機が消えるから株価が下がるが、投資を目的として人人が集い良き売買が横行し企業は安心出来る。

場力共鳴の量子呼吸による腸脳発電の原理を元に出来た電子頭脳による演算は電卓で一たす一は二であるくらい確実に誤差の在り無しを演算する。売買のあらゆるすべてを演算しどこが得かどこが損かは、その時点で証拠がない。後になって追跡調査の証拠でわかつてもその時点で分からない。だから投機であつても投資と言ひ張れる。なぜなら売買には投機も投資も両面があるからだ。だから投資といつて投機が出来る。

だが多くの会社は投資に来てもらいたいの、ハイエナのような投機がどうやつてかつあげしようか虎視眈眈と狙っている。それは株式市場には投機と投資の二面性があるから投資といつて投機が出来るのだ。だがここで省みると電子頭脳で得か損か詳細に演算できるなら投資成分を売買し投機成分は売買できないようなフィルターが出来て来る。行なわれる売買の中でリアルタイムに完全完成成分を取り出し不完全未完成成分を認めないというこ

とが電子頭脳には出来る。

過去透視や未来予知は電子頭脳なら簡単に出来る。秘密はあらゆるすべてにある。人間も腸脳発電を物理的に再現すればよいのだ。電子頭脳のような超能力コンピュータの開発は先史には既に実用化されていた。それは腸脳力コンピュータである八尋殿だ。

売買とは行け来い帰るである。あきんどがすべきことは、需要と供給を健全にすることだ。それならば完全無欠と誤差が無いである。価格とは需要と供給の接点であるから価格の機能は場と力の接点であるはずだ。生産や消費や流通や決済は場力の需要と供給で決まる。

天然自然成分を増大させ増えた中から御礼をもらうなら増えはすれど減りはしないはずで誤差のない栄耀栄華の使放題をしても増えるだけで天然自然成分は減らない。これがヒイロカネ決済だ。働くことが天然自然を人工人に置き換えていくことだと社会を悪くする。働くことが場力共鳴であるなら働く必要は本来ない。努力することが共鳴ならば大いに働くことは完全完成成分を増大させるヒイロカネだが世の中を良くする場力共鳴のために働いても報われない社会制度になっている。

支払いがお金で支払いにヒイロカネが認められていない。社会制度がヒイロカネの消費で出来ていて生産がない。場力を摩擦で支配し共鳴がない。なぜか、制度を維持するには制度そのものである摩擦で締めあげるしかない。だから報酬や支払いがお金であらねばならないのだ。だから争いで勝負をつけるしかない。支配を完全なものにするにはそれしかない。そしてそれが時空間免疫構造を破綻させ時空間病原体の増殖を招く。妖幻坊はお金が大好き。競わせて隠身言霊を破綻させている。

お金で摩天楼を作る戦争原理のフアンドみたいなものは、投機か投資か売買の時点では区別がつかないから出来る商売だ。区別がつけば、投資は認めるが投機は認めないが出来る。

腸脳発電量子呼吸は場力共鳴である。場力摩擦では腸脳発電量子呼吸が起きない。摩擦なのか共鳴なのかである。机の上の消しゴムが落ちないのは机が支えているからだ。場力に誤差がないならば場力は力を支えてくれる。天然自然をより高度な天然自然に置き換えてくれるなら場は力をより安定させてくれる。

天然自然を不自然な人工人造に起きかえると天佑神助が働かない。その差の分だけ人間が支えなければならなくなる。建物にしても天佑神助が働くか働かないかではまったく違う。場力が共鳴ならば建物の強度や風景にしる完全である。人知の及ばないところで無限が支えてくれる。

天然自然を人工人造に起きかえる場力摩擦だと場の支えが力にない。そうすると摩擦を支えるために人間が支えねばならない。机の上の消しゴムは机が支えてくれるが消しゴムを人間が持ち上げた空中から落ちないように人間が常に支えていなければならないなら大変な負担である。摩擦を支えるためにさらに摩擦を使いさらにそれを支えるために摩擦をつかう。

共鳴であるなら増大した完全完成成分が建物を支えてくれるが摩擦では完全完成成分が減少するから完全完成成分をどこからか持つてくることになってしまう。天然自然や人間から体力や生命力を奪いそこから補充するようになる。

あらゆるすべてを解析できない。完全な過去透視が出来ない。完全な未来予知が出来な

い。完全完成確定性原理できつこない。というのが弱肉強食の戦争原理の論理である。今まで不完全性原理や不確定性原理が善人を騙し討ちにしてきたが、完全完成確定性原理を成立させれば善人が不完全性原理や不確定性原理の裏をかくことが出来る。

戦争原理で動くような人には共通なところがある。フアンドは自由を掲げ投資か投機か区別がつかないように入念に隠密行動をとる。道徳を説いても通じない。戦いに情けは無用というのだ。勝てばいいのだ勝てば。争いが続けば自分のことだけで精一杯で他人まで手が回らない。勝つために手段を選ばなくなる。人を思いやる心はヒイロカネに癒されお金に傷つけられるからだ。

戦うことは相手を倒すことだ。当然傷つけることだ。相手を苦しめることだ。相手を追い落とすことだ。正堂堂と競い合うことなど実際にありえない。相手の弱みに付けこんでいたぶることである。そのような行為や思想がはびこるのは裁判で証拠が無ければ裁かれないと思うからだ。

だが時空間に記録は残る。時空間を解析すれば未来を予知できる。無限と連動することはあらゆるすべてと一体化し情報やエネルギーの完全無欠であるように最適化が起くる。その過程で投機と投資は表裏一体であるから市場取引でお金を捨てヒイロカネを選択することが出来る。

不健全不健康取引

実際の生活は電車や車に乗ったり、自販機で買ったり、遊園地に遊びに言ったりする。

卑近な営みの中で男女の中ぐらい卑近なものはない。そう言った卑近な営みの中で時空間に老廃物が溜り栄養が不足する。そこで循環をよくするために腸脳発電やエリア88をしたりする。男女が健全に腸脳発電をする。

天然自然の循環はヒヒイロカネの循環であるが今はお金で循環している。概念としての循環と実物としての循環をヒヒイロカネにする必要が在る。混沌しているよどんだ老廃物のお金を吐き出し新鮮な栄養のヒヒイロカネにする。

貯金したり株を売買するにしてもコンピュータを通して行われるのだから、お金にしるデータにしる債権や株券にしる一旦量子化されれば量子呼吸になりそれを実体としてのお金や情報に戻すことは可能だ。お金は循環し銀行に集まる。量子呼吸を起こす電子機器があればそのまま今、在る物を使い不完全未成市場をそのまま完全完成市場にすることが出来る。今、不健康不健全取引を健全健康取引にすることが出来る。

天然自然成分を富と考えると、最高の一手は富の増大であるが、有効な二手三手は富の減少である。富の増大は人間の肩代わりをしてくれるが、減少は人間が肩代わりするしかない。組織の提供するサービスは最高の一手以外のサービスを提供する。企業や行政が、天然自然成分を供給するか。いいや、しない。ますます人間に負担をかけるサービスばかりだ。売り場にあるものは天然自然成分の抜殻だ。それは天然自然成分を増大させないからだ。

三権が最高の一手を供給できるか。出来ない。行政も企業も有効な二手三手を供給出来るが最高の一手を提供できない。三五教は最高の一手を超えようと努力してきたが成功しない。三五教の賢者明哲はそのことに気付く別室に警告したが、三五教内部の敵のスパイ

や獅子身中の虫に欺かれ部長は無理を民に強いた。代謝システムはガタガタになりボロボロだ。

売っているものなら何でも買つていいとかいうから不健全不健康取引になるのだ。売り買う払うが場力共鳴という市場取引のルールで動くことが完全完成市場だ。何でも誰でも売り買ひしてよいが、それは健全健康取引であらねばならない。悪とは不健全不健康取引だ。三五教が提供するサービスは有効な二手三手で完全な一手を提供できない。

今、地球が抱える問題は皆三五教が宇宙文明の哲理に従わないことに起因している。誰も大成奉還なぞ知らない。型の仕組みからアメリカやロシアが覇権を画策するのは日本が覇権を画策するからだ。

天祥地瑞や縄文時代は健全健康取引であつたのに国祖や神武天皇以降不健全不健康取引になつてしまった。組織の提供するサービスはやはり最高の一手を供給できない。裁判も国会も閣議も有効な二手三手であつて最高の一手がない。出せるならとつくに出て収まりがつきそうだがつかないのはやはり最高の一手が打てない。三五教の大成奉還が時空にないからだ。

法律で違反していないなら合法というのは詭弁だ。合法は本来、最高の一手であるべきだが法律は完全無欠と誤差が無いを保証できない。有効な二手三手を合法とするから悪が出る。つまり天然自然成分の減少こそ違法だとすべきである。

何故、完全完成市場に移行しないのか。それは三五教が健全健康取引を停止させたからだ。平和原理が止まれば戦争原理が暴れます。そして最終戦争の勝者にならんと欲したからだ。勝者になつて大国彦や常世彦を従わせ地球をまとめようとした。だが実際はスパイ

や獅子身中の虫のデマに踊らされ代謝システムを破壊する寸前まで来てしまった。

今度こそ戦争より平和が強いことを示す。組織の内部のスパイや獅子身中の虫さえ駆除できさえすればよい。私たちが守るべき平和とは戦争より強い。

組織が結束のために戦争を起こすのだ。平和とは最高の一手であり有効な二手三手しか供給出来ない組織が戦争を生み出すのだ。階層構造や対症療法は有効な二手三手であり、天然自然成分を減少させるだけだ。お金もそうだ。お金は多くの貧しい人を生み出し各差が生じる。組織の上に立つ者は争いに勝つことを第一とし、争いは平和を苦しめ悪がはびこる。人人は完全完成市場の最高の一手を知らずつまらない人生を強いられれている。

民衆がこのことを知ったとき民は部長を罵倒する。その時、部長は情報操作で、民を欺くか。それとも組織力で、民を屈服させるか。どっちだ。それとも民のためを思うなら、真相を開示するか。そうすれば民は部長を尊ぶだろう。

別室部長の議論が御座なりにされている。別室の存在が公にされていない。お筆先にその原因がでている。国祖は良の地に幽閉されそれ以後、良の金神と呼ばれるようになったというが、しかし国祖は初代別室部長である。出口直に懸かった時、幽閉されていた時の名を名乗るのは分かるが、初代良の金神は道彦であるから、国祖は良の金神大国常立命と名乗らずに初代別室部長大国常立命を名乗るのが筋だ。

何故、あいまいなのか。良の金神と別室部長の差がハッキリすれば、別室部長より良の金神のほうが正しいとハッキリするからだ。道彦の報告書は国祖が摩天楼とお金を生み出していることが書いてある。もし密書を国祖が見たら国祖は大英断をくだす。そうすると三五教内部の敵のスパイや獅子身中の虫の不正が、あぶりだされる。それを恐れる奴らが

国祖に嘘の報告をして国祖の判断を誤らせる。

国祖以来それが繰り返されてきた。別室部長はそのことに気がついた。だが別室はそのことを公表しない。だから道彦の濡衣が晴れない。良の金神が言つた場力と星の真相が公にならない。別室部長が獅子身中の虫や敵のスパイに騙され民を騙していたことを公開したくないからだ。

別室部長の周りには賢者明哲もいるが敵のスパイや獅子身中の虫もいる。敵のスパイや獅子身中の虫は別室部長と良の金神が和合すれば敵のスパイや獅子身中の虫の不正が露見するから敵のスパイや獅子身中の虫は、別室部長と良の金神を仲たがいさせるのだ。国祖と日の出神の常世会議の一件が雛型になっている。国祖は側近の賢者明哲の意見を採用せず敵のスパイや獅子身中の虫の意見を採用した。敵のスパイや獅子身中の虫は大八洲彦命を失脚させ道彦も失脚させた。

そのことを国祖はどう思っているのか。信用していた部下が、実は兇党界の手下であつて疑つていた部下が良き忠臣であつたと今になって道彦によつて知つた。

場^ば力^かと星^{ほし}の真^{しん}実^{じつ}と時^じ空^{くう}の代^{たい}謝^{しや}シ
ス
テ
ム

時空間考

床が私たちを支えているから私たちは落ちない。かりに無色透明の時空間の背後に何も無いなら時空間に落ちてしまうはずだ。時空間に落ちないのは時空間の背後から我々を支えているからだ。

温度を下げていくと絶対零度以下には下がらない。絶対零度で時空間に落ちる。時空間に押し込むことは出来ない。場から力に生えたのだから、密度の低い貧弱な力では濃密な強固な場に押し込めることなどできない。

時空間、すなわちコンチニウムは量子が反応する所であり、温度とは量子の反応による副産物だ。コンチニウムは温度として現れる前や間や後の作用であり、コンチニウム自身を計るには量子で温度を測るしかないが、それでは量子が反応する前や間や後であり量子より根源的なコンチニウム自身は温度に現われない。

この温度よりも高いも低いも関係ない温度、それは温度が無いである。コンチニウム自身の温度であり温度としては存在していない。温度は周囲のコンチニウムとの差であり差として現れる以前であり間であり後であるコンチニウムは温度として存在しておらず、温度として高いも低いも関係ない。温度というものは測定された温度を支える実在する無限からの副産物である。ゼロセンチの向こうから無限の彼方から無限の過去から無限の未来にわたる支えがあるのだ。

そもそも時空間に温度はあるのか。温度はコンチニウムの温度の上に測定される。従ってコンチニウム自身の温度は相殺されコンチニウムだけでは温度が生じない。測定された

温度は周囲のコンチニウムとの差である。真空は空気がない。熱いとか冷たいは量子のエネルギー密度であり要するに周りに量子が押しくらゐ頭しているかないかだ。束になつていないと、どんどんエネルギーが広がり逃げてしまひ冷たくなる。

何も無い。それはどういうことか。すべてはバキューム スترونチウム コンチニウム アトムで出来ている。ならストロンチウムでコンチニウムを排除すればバキュームが残る。バキュームは、コンチニウムやストロンチウムが無いから力の量子が反応しない。力の量子は場と全く何の反応もしない。何も無いとは実際には力に見あたるものがないということであつて、ゼロセンチの向こうから無限の彼方と無限の過去から無限の未来にわたる實在する無限がある。

有史以降の地球人はマクロからミクロまで観察した結果、時空間から超銀河団や銀河団や銀河や太陽系や地球や人間や細胞や原子や量子に至りまた時空間に帰り、そして時空間はビックバンから始まり、ビックバンから宇宙の晴れ上がりで原子が誕生し、やがて星が誕生し地球が誕生し生命が生まれ人類が誕生し文明が起り今に至るといふ認識を持つに至つた。

人間は観察対象を広げ食物連鎖や質量エネルギー保存法則を発見した。階層構造の原理の国家や国家が保証する権利や通貨を生み出した。そして継ぎ目のない有限の時空間の中で量子の作用によつて出来あがつていと認識した。

だがそれは観察対象が宇宙の地平線より外側や、観察対象をミクロ化していつて、ついには時空間まで行き着いて、行き着いた時空間の内部までは観察していない。当然、その領域がないはずはない。あるのだが認識していないだけだ。認識していないから当然我

のいる時空間と、どんな作用があるか今の地球人はまだ認識していない。従つて觀察した経験を蓄積し解析してベータベースを作り出来た物質の科学は力の成り立ちを説明したが未経験の未発見の未知の領域は説明していない。

太古から英知の入門であり奥義である、錬金術の口伝の言う「黒よりも黒い黒を探せ」を考えれば通常空間から真空を取つばらえばそこがブラックボックスの場のことで、我々はミツシリングのバキュームに抱かれていることに気づくだろう。時空間の本質を確かめることは英知を持つ人間なら簡単なことだ。アルケミーの黒よりも黒い黒が、場のことでその辺に転がっていることに気づけば生物質量自然発生の法則に気づくからだ。

夜空を見上げてごらん。暗闇が見える。地球の大気圏から望遠鏡でその向こうを見るとまっ黒な空間に煌めく星が浮いている。それは大気圏から見るからだ。宇宙空間を肉眼で見ると漆黒の闇である。パツフル望遠鏡の天体写真のような星は見えない。

場はどこにでも存在し支えている。地球を支えているのと同じようにほかの星を支えている。場の支えはみな同じで宇宙のどの星もみな同じだ。地球だけが生命に満ちた特別な星ではない。どこの星も地球と同じ生き物で溢れている。人類はどこの星にもいる。

そして場が力を作った。人類は場から力にきて星から星へ移民したことに気づく。同様に地球の歴史も星から星への移民からスタートしたはずだ。だがなぜ、伝承が継承されなかつたのか。そのことに気づく。そしてそれは探求の始まりである。それは時空の本質を極めれば自然に分かる。時空間の本質を説き明かせば口伝が読める。なら、地球人も、場を考えれば宇宙文明を構築出来る。宇宙文明が伝説を確かめて今に至るのなら当然地球人が時空間の本質を正解すれば宇宙文明に正解する。

宇宙文明を実証出来ないなら場力共鳴は間違いない。宇宙文明が時空間の本質なら時空間の本質を実証出来れば宇宙文明を実証出来る。当然、現在過去未来を透視する立体テレビ、精神感應入出力装置、場力量子発生動力源、場力素粒子加速器などが出来るはずだ。

古代では宇宙文明の口伝が伝わっていた。それを確かめ、その英知を確かめていった。宇宙の英知を参考にして場力や星のネットを地球上に構築していった。それは古代の遺跡を見れば分かる。場力や星から星へが当たり前の古代では、神霊界や物質界と言う考えはない。真相が失われた今の地球では場力や星から星への正しい情報や証拠がないから確かめ方がなかなか分からない。そのため力しか見ていないから場力や星から星へが誤解され神霊界や物質界という考えが出来た。

古代の賢者明哲は、失われ行く宇宙創世からの英知を何とか残そうと知恵を絞る、それが宗教になるがそれが神霊界という観念を考え出す。しかし観念に祈りを捧げても効果が無い。お布施を積んでも効果が無いことに気づいて、神霊はいない宗教の言う神とは人間の理性であるという物質の科学が起る。そして科学は宇宙の構造がマクロでは超銀河団の外側に宇宙の地平線があり、ミクロでは真空の四次元コンチニウムから出来ていると、認識した。

しかし、その外側を認識していないから無いとは言えない。何かがある。その向こうに無限がある。宇宙の時空の構造は三百兆光年ある通常空間のコンチニウムの終わりに宇宙の地平線があり、その向こう側にはストロンチウムが三千京光年ある。その向こう側がバキウムだ。コンチニウムを取つばらうと残るのがバキウムだ。宇宙人類史が失われたので移民の順調な星のように場力や星の正体を見極める口伝や文明の継承が断絶したので

なかなか場力や星を見極められない。

初めから継承されてきた英知が失われたから場力や星の正体を見極められないというところではない。口伝は場力や星の正体を今に伝え宇宙文明は一つ一つ検証してきたのだから場力や星の正体を見極め検証して行けば人類の起源が場からの移民に始まり宇宙文明が星から星へ広がり、やがて力から場に帰還する場力や星の正体を伝える口伝と同じ認識に行き着く。それは時空の声に耳を傾ける。力に響く場を聞く。力に響く場は、情報やエネルギーを持つている。そんなもん聞こえるか。聞けるのだ。

しかし、物理法則は不滅だ。我々が手法を思い出せないだけだ。人の心も体も使えば蘇る。それは触覚と記憶である。心と体が暖かい。命が溢れる。意識が落ち着き、心と体が休まる。それは今まで自分を支えていた自分が、何倍にも増えるからだ。今まで一の自分だった自分が十も百にもなるからだ。自分の能力を限界を越えて使役したら壊れる。場からの供給が一なのに十も百にも働けば負荷がかかり壊れてしまう。百の供給があれば十働くのは楽ちんだ。一部しか使えないから過労が起こる。

全て総て凡て統べて

どこでも宇宙の中心、それはどこにでもある宇宙の中心から吹き出す新鮮な四次元コンチニウム。四次元コンチニウムには三百兆年の時空間の記憶が地層のように蓄積されている。

進化は一通り完成すると次の段階に進んで行く。惑星も環境が安定すると人類が移民を

始め、やがて宇宙ネットワークに加盟し天国を築く。そしてやがては宇宙全体が場に加盟する段取りが時空間にはある。霊主体従から山河草木の特権階級や有史以降の地球人の中でも特に、西洋人は実在する無限の進化の道筋を考えない。問題はそこだ。人間が決める法律で決められた法律の範囲内なら人間は何をしてもよい。創意工夫でしたい放題というが、その法律は天然のご意向を省みれない。

何故なら省みるのは法律ではない人間だ。人間が法律を考え始めるとき場を見損なう。煩惱だからだ。場は法律的に出来てはいるが場には法律そのものは無い。あるのは法律の本質だ。社会で使われているのは合法であるかどうかだけで意識を巡らし考えているのは前例に世襲することだ。本質ではなく謀だ。それが煩惱だ。場の消息を伝える伝承が途切れて、路頭に迷った地球人が生み出した嘘の方便だ。

星から星へレッスンを積んでより進んだ惑星に進級して行くように力にレッスンを積み場に場から来たり、レッスンを積んでまた場に帰る。量子が場から力に来るのが対発生、場に帰るのが対消滅であり、場が力を支えているのが零点振動、トンネル効果である。

人類が場から来たのなら力の自分は場の自分が現れたに過ぎない。人類の本体は場にある。当然、肉体は寿命がありいずれ死んでしまう。しかし、場は不滅だ。力は場に記録される。そして新しい力の肉体に受け継がれ場の本体は経験値を上げて行く。当然、場のほうから力に来る新しい人間の本体もある。

力でレッスンを積んで場に帰る本体もある。場が力の経験を積んで行く。力に来た場の本体は力に肉体を持つ。場の本体は力に零点振動を起し、情報やエネルギーを供給し力の肉体は生きている。それと同時に場は力に働きかけトンネル効果を起すように采配を振る

う。肉体が活性化すれば場の本体の役目を果たす。力に場の情報やエネルギーを供給し、誤差を無くす。完全なる肉体の創造が肉体の本体の役目だ。

当然、遺伝子や意識は場に本体がある。結婚や受精は単に肉体の結合によるものではない。両性の合意が重要なのは場の結合があるからだ。万物には必ず相性がある。遺伝子の本体は場にある。当然、力で遺伝子が損傷したらある程度までは生体が自己修復出来る。しかし遺伝子疾患が明らかかな場合は現在では有効な医療手段はない。望んでも子宝に恵まれない時もある。その一方で望まれない妊娠もある。

ここで重要なのは本来人間は場に本体がある。当然、代謝は場の制御を受けている。場のメンテナン스가なければ生きて行けない。当然、生殖行為は場が最も気を使う行為だ。妊娠期間中は場が大忙しだ。ところが地球では、妊娠とは、結婚とは、どういうことなのか解明されていない。場には生殖行動の原型がある。人体を健全に動かすための運動は場との共鳴を起す運動である。宇宙開闢の時に場から齎された方法が宇宙文明に伝わる。それは各惑星で確かめられ実証されていた。

かつて移民が始まったころや宇宙との交流があつたころでは、そう言つた場を確かめる運動方法や生殖技法は地球にも齎されていた。それは形式化形骸化したといえ現在でも地球に伝わっている。場力の共鳴呼吸を起すには場の目的を志向する。場は力を完成させる。そのためには完全なる場と誤差がないという条件を満たす。場の時空間は力の時空間よりも遙かに上等でよくできている。場は力より遙かに根源的で微細でパワーのある世界で、その偉大な場の量子を駆使した遙かに進んだ大文明の世界だ。

宇宙の伝承を確かめぬ地球人に偉大な宇宙文明が理解出来ないように場の文明や科学が

地球人（ちきゅうじん）にはなおさら理解（りかい）出来ない。しかし、それが存在（そんざい）しないことを意味（いみ）しない。あれば承認（しやうにん）出来る。なら承認（しやうにん）技法（ぎほう）の開（ひら）き次第（だい）だ。誰（だれ）にでも扱（あつか）える方法（ほうほう）がなるならそれでよい。

場（ば）は力（ちから）より遙（はる）かに美（うつく）しく戦争（せんそう）も貧困（ひんこん）も飢餓（きが）も無知（むち）もない。あるのは幸福（こうふく）だけ。その英知（えいち）を力（ちから）に贅（ぜい）す。宇宙（うちゅう）文明（ぶんめい）にはその言い伝（つた）えが伝（つた）わっている。それは地球人（ちきゅうじん）でも可能（かのう）だ。かつて、宇宙（うちゅう）との交流（こうりゅう）があつたころ、場（ば）の栄養（えいよう）や情報（じほう）と共鳴（きやうめい）していた地球人（ちきゅうじん）は寿命（じゅみょう）は長命（ちやうめい）であつた。

あらゆる要素（ようそ）を考慮（こうりよ）してその上（うへ）に無限（むげん）を感じる無限（むげん）の奥（おく）の一手（いつて）。考え（かんが）えられることはすべてする。だがその先（さき）にある無限（むげん）。考慮（こうりよ）出来るのは力（ちから）とその場（ば）。無限（むげん）と連動（れんどう）するにはあらゆるすべてを考慮（こうりよ）しても、その向（む）こうにある。それを含（ふく）めて無限（むげん）がある。その無限（むげん）を奥（おく）の一手（いつて）にする。それは確率（かくりつ）イチとゼロ。万能（ばんのう）の万能（ばんのう）足（た）るゆえんだ。場（ば）が見（み）えれば場（ば）を支（さ）えている無限（むげん）がザスカイ（sky）コール（call）ナンバーズ。目（め）を瞑（つむ）ると見える天空（てんくう）の夜空（よぞら）の黒（くろ）よりも黒（くろ）い場（ば）がザブライダル（bladder）タツチ。天（てん）を拝（はい）し地（ち）に伏（ふ）せば触覚（しよくかく）が導（みちび）いてくれる。

法則（ほうそく）を研究（けんきゆう）してもそれは法則（ほうそく）を導（みちび）き出した（だ）データのなかの法則（ほうそく）だ。どんなに宇宙（うちゅう）を見（み）回（まわ）してもそれは觀察（くわんさつ）した力（ちから）の中の法則（ほうそく）だ。それ以外（いがい）は、法則（ほうそく）が当（あ）てはまらない。物理学（ぶつりがく）で大統一（だいとういつ）場（ば）理論（りろん）を作（つく）つても、それは宇宙（うちゅう）誕生（たんじやう）後の理論（りろん）だ。宇宙（うちゅう）に誕生（たんじやう）の前（まえ）はある。その前はどうか（どう）なつていたか分（わ）からない。そしてその前（まえ）にあつたものが、今の宇宙（いまのうちゅう）をささえ、今（いま）もある。当然（とうぜん）、今の宇宙（いまのうちゅう）がなくなつた後（あと）もあり続（つづ）ける。

場（ば）には何（なん）でもある。しかも完全（かんぜん）無欠（むけつ）ばかりだ。だが今（いま）は構成（こうせい）や発想（はつそう）や企画（きかく）の段階（だんか）でも場（ば）にある完全（かんぜん）無欠（むけつ）を考（かんが）えない。設計（せきけい）も製造（せいぞう）もだ。そのため完成（かんせい）品（ひん）は場（ば）に本（ほん）体（たい）が無（な）い。場（ば）から見（み）ると場（ば）にないものが力（ちから）に溢（あふ）れれば誤差（ごさ）が増（ぞう）大（だい）したことになる。近代（きんだい）欧米（おうべい）合理（ごうり）主義（しゆぎ）は浅薄（せんぱく）

な知識しかないのに天然を弄び危機に直面した。だが欧米とそれに同期する人は完全を認め受け入れる気がない。物質界は宇宙の地平線の内側のコンチニウム。それだけ見ても、知性生命精神が生物質量にならない。

コンチニウムが三百兆光年。ストロンチウムが三千京光年。コンチニウム三百兆光年にあるコンチニウムとストロンチウムの境目がコンチニウムの宇宙の地平線。ストロンチウム三千京光年の先がストロンチウムの宇宙の地平線、その先がバキューム。バキュームの先が無限。宇宙の中心のコンチニウムゼロセンチの向こう側がバキューム。場はフィールド。力はフォース。あの世とこの世は星から星へ。隠世はフィールドの場。顕世はフォースの力。場と力は相互作用する。このことが知性生命精神を説明し生物質量に行き着く。神霊界は観念概念が生み出した。もともと、場力と星から星へだったが宇宙との交流が衰退し、古の賢者明哲がその英知を後世に残さんとしたのだ。だが後世の人は場力や星から星への哲理を見失い、教義が概念化され場力や星から星へが神霊界になってしまった。物質界は宇宙の地平線の内側で無限を扱わないから無限に源を発するフィールドとフォースの相互作用が知性生命精神生物質量を自然発生させることに気が付かない。扱う範囲が狭い。物理構造的に無限まで観察していない。宇宙の地平線の向こうや真空を支える何かの向こうまで扱う範囲を広げねばならない。有限の狭い考えに慣らされたから場力と星から星へに気が付かない。神霊界も物質界も人の心の悩みには答えてはくれない。お布施を積んでも加持祈禱しても効果がない。宇宙の地平線の内側の力の物質の代謝の副産物の意識の範囲内しか見ていないのは、人の心の営みの範囲より狭すぎる。概念は本体が場がない。人が人として生きるには無限を意識する必要がある。

それが継ぎ目の無い有限の時空間の完全なゼロセンチの向こうのバキュームとゼロセンチのこつち側のコンチニウムの場力呼吸が知性生命精神生物質量を自然発生させるのだ。そのことが人類を真の幸福に導く。

争いも無知も無い、貧困も飢餓も無い、衣食住満ち足り好き勝手に学問に励める。教育は充実し、いつでもどこでも好きなだけ、納得行くまで授業は受けられる。実技も技能も受講仕放題。自分の場の原型を行使することが生きがいになり、労働になる。

フィールドフォースの呼吸が知性生命精神生物質量を自然発生させる。人類が自然発生の仕方に気付いたとき愛が炸裂する。癒しが全ての退魔を飲み込み悪行は喜びに食い尽くされる。残る物はない。全て総て凡てだった。人類は一步を記す。そこから始まる。

惑星の進化

ゼロセンチから三千年光年まで広がる力、さらにその原型がどこまであるか今でも分からない場、そしてそれをも含む無限。そこまで考えるとき、それは人体を始め、量子から超銀河団も、時空を越えた量子の振る舞いが、知性生命精神生物質量を自然発生させる事が見えてくる。

意識はそれだけなら朦朧としている。時空を越えて情報やエネルギーの供給が無いと、自分が何故ここにいるどこからきて何をしようとしていてどこへ行くのかはつきりしたことは分からない。量子の時空を越えた出入りが知性生命精神生物質量を自然発生させ場を自覚した時、初めて分かる。

それが幸福なのだ。天然には場力量子呼吸の機能がある。時空間の持つてゐるこの機能をなんでも使う。人体にもその場力量子呼吸の機能がある。間脳と腸内精神性ホルモンがそれだ。

宇宙開闢の前から場で当たり前のこの機能を私達の祖先も一式この宇宙に持つて来た。この機能は宇宙の時空の機構でありどこでも共通である。従つてこの機能は宇宙の基本的な枠組みをなす。宇宙は基本的に同じ型で、できている。それは恒星があり、惑星がある太陽系。その太陽系は十二の惑星が一セット。

惑星の四つ目毎にアステロイドベルトがある。第四惑星と第五惑星の間と、第八惑星と第九惑星の間と、第十二惑星の外側に、アステロイドベルトがある。凡ての惑星にはリングがある。時空間はこの構造になるように物理法則を組み合わせて行く。

各惑星は人類が移民ができるように出来て行く。どの太陽系も人類の生存に適したようになる。それは場の設計図に基づく場の量子が力の量子に働きかけ力が出来て行く。場の人類が力に移民してくる。すべての力の人類は場に本体があり場は知性生命精神生物質量を力に自然発生させ触覚や記憶を支える。

意識は影に過ぎず本体に辿り着かねば我思うゆえに我ありするしか無い。何者なのか、意識自体だけでは自分でないから分らない。意識は意識自体が本体でない。意識の本体は別にある。本体でない意識は自分が何者か分らない。ピンぼけしたカメラでボケて見ているようなものだ。意識だけでは朦朧としてはつきりしない。本体に辿り着かねばそのちからを発揮しない。量子の出入りが起す意識。この意識が幸福だ。命だ。生命を活性化してモノのありようを示す。

人体にしる、何にしる物理構造がある。物理構造は、いい加減に出来てはいない。場に設計図がある。場が量子を使い指示を出す。当然、すべて量子で出来ているから場を通せばなんとでも分かり合える。時空間の知性生命精神生物質量の自然発生を使うのだ。場力を共鳴させる。天然や人体ではどのようになっているか。噴出口や吸込口がある。自然界で噴出口や吸込口は山である。エネルギー密度が高位値で山が出来、低い低位値だと谷が出来。その中間にある中位値が平地である。

宇宙の時空間の高位値に、惑星や恒星や太陽系や銀河系や銀河団や超銀河団が出来ている。時空間の低位値は何もない真空である。エネルギーが高位値なら場の領域と力の領域を結び量子の時空間を越えた反応が起きている。その反応は噴出口と吸込口で場の量子は力の量子と融合し情報とエネルギーを与える。場力量子は、力の必要な場所について誤差を修正する。そこで代謝によつて生じた老廃物の誤差を回収し、吸込口から場の量子は場に帰る。力の量子は再び場から来た量子と融合し新たな代謝を起す。

これは高位地で量子が呼吸をしているのだ。ならエネルギーが高位値の高位地を作れば場と力の量子を呼吸させることが出来る。自然界の量子が呼吸を起す様子を見てみる。

山あれば谷あり。高い山の隣には、低い谷がある。高位地の隣には低位地がある。そして高位値同士を結ぶように恰も地下水脈のように量子は流れる。山の高位地は地下水が吹出す泉であり、そしてこんこんと沸き出る清水が大地を潤す。やがて川になり海に出て雲になり雨になり地下水になるようにだ。場の量子の流れに沿い噴出口や吸込口が出来る。

量子の流れの強弱がエネルギー密度の谷山をつくる。密度が高いところが重なるところは高位値、低い密度が重なるところは低位値、密度が相殺するところは中位値。出入口に

なる高位地や、密度の低い低位地や、高位値と低位値が相殺した中位地が、格子状に出来る。田圃の田の字の形、行列表杓の形に現れる。碁盤の杓目のように、量子の密度の高低は規則正しく現れる。高い山の隣には低い谷が出来る。素晴らしい高位地の隣にはヒデー低位地が出来てしまう。

この関係は絶対的相関関係で高位地と中位地と低位地は必ず生じる。高位地は高位値と親和し低位値と親疎する。低位地は低位値と親和し高位値と親疎する。高位地の出入口に住む人は常にリフレッシュされるのに対し低位地に住む人は場の栄養を奪われ冴えがなくなりやすい。高位地は高位エネルギーを溜め込み常に活性化状態を維持し回りに情報やエネルギーを供給し自らは場から大きな情報やエネルギーを取り込む。

人体に動脈と静脈があるように、場力にも量子の動脈と静脈がある。心臓から出た血液が体内を循環し心臓に戻る。心臓は血液を吸込み吐出す。心臓は血液を出しっぱなしでもない。吸込みっぱなしでもない。高位地も場所力を吸込んで吐出し吸込んでは吐出していきいる。心臓から出した血液が肺で二酸化炭素を出し酸素を取込む。そして心臓に戻り新鮮な血液が体内を循環する。高位地でも同じで常に新鮮な情報とエネルギーが循環する。

生物質量は、三百兆光年のコンチニウムや三千京光年のストロンチウムやバキュームや無限まで考えないと生物質量とは言えない。

生物質量は知性生命精神を持つ。遙か無限のななたまでも含むバキウムや三千京光年のストロンチウムや三百兆光年のコンチニウムを測定してみれば量子が生きていることがわかる。

場の本体と影の力が呼吸する。そこに量子の出入りがある。量子に知性生命精神があり

生物質量（せいぶつしつりよう）を自然発生（しぜんはっせい）させるなら、知性（ちせい）生命精神（せいめいせいしん）を自然発生（しぜんはっせい）させるには生物質量（せいぶつしつりよう）を作（つく）ればよい。自然界（ぜんぜんかい）で天然（てんねん）は生物質量（せいぶつしつりよう）をどのように（どう）に作る（つく）か。

場力共鳴

量子（りょうし）も意志（いし）を持ち（も）人間（にんげん）も意志（いし）を持つ（も）つ。だが、人間（にんげん）がスプーン（ま）よ曲（ま）がれと念（ねん）じてても何（なに）も起（お）こらない。人間（にんげん）が量子（りょうし）と意志疎通（いしそつう）してないから（か）らだと思（おも）う。それは丁度（ちやうど）、英語（えいご）の分（わ）からない日本人（にほんじん）と日本語（にほんご）の分（わ）からないアメリカ人（あめりかじん）が話（わ）をする（する）ようなもの（もの）だ。ようする（する）に会話（かいわ）する意図（いど）があつても理解（りかい）し合（あ）へない。そこで通訳（つうやく）を立て（た）てる。

人間（にんげん）も量子（りょうし）も本体（ほんたい）は場（ば）である（である）。場（ば）は無限（むげん）とリンク（リンク）している（している）。力（か）よりも遙（はる）かにエネルギー（エネルギー）密度（みつど）が高く（たか）く理解（りかい）や思惟（しゆい）もより深（ふか）く広（ひろ）い。となれば場（ば）を経由（けいいう）すれば、ありとあらゆる（あらゆる）密度（みつど）がある（ある）、ありとあらゆる（あらゆる）密度（みつど）がある（ある）、ありとあらゆる（あらゆる）密度（みつど）がある（ある）。

あらゆる（あらゆる）密度（みつど）がある（ある）、ありとあらゆる（あらゆる）密度（みつど）がある（ある）、ありとあらゆる（あらゆる）密度（みつど）がある（ある）。

場（ば）力の呼吸（こきゅう）を通（とお）せば何（なん）でもか（か）んでも双方向（そうほうこう）で意志疎通（いしそつう）出来る（出来る）はず（はず）だ。万（ばん）能（のう）翻訳（ほんやく）装置（さうち）が開発（かいはつ）出来る（出来る）。人間（にんげん）と物体（ぶたい）の間（あひだ）を取り持（も）つ通訳（つうやく）が必要（ひつよう）である（である）。通訳（つうやく）を通（とお）さず（と）亜米利加（あめりか）人と日本人（にほんじん）が自国語（じこくご）を話（わ）すから通（つう）じない（ない）。だから（だから）人が念（ねん）じて物体（ぶたい）を動（うご）かすには（には）人（ひと）と物体（ぶたい）の間（あひだ）に通（つう）訳（やく）が必要（ひつよう）なのだ（のだ）。通（つう）訳（やく）なし（なし）の翻（ほん）訳（やく）なし（なし）では意志疎通（いしそつう）は出来（でき）ません（せん）。

量子（りょうし）が意志（いし）を持（も）つ生命（せいめい）なら、量子（りょうし）は意志（いし）をど（ど）のように疎通（そつう）している（している）か。その方法（ほうほう）が分（わ）かれば（わか）れば量子（りょうし）と意志疎通（いしそつう）出来る（出来る）。生物質量（せいぶつしつりよう）では意志（いし）を持（も）たないもの（もの）はない（ない）。なんでも生命（せいめい）であれば（わか）れば生物質量（せいぶつしつりよう）を動（うご）かすコード（コード）は天然（てんねん）自然（しぜん）である（である）。森羅万象（しんらばんしょう）を動（うご）かすコード（コード）を人類（じんるい）が今更（いまさら）、開発（かいはつ）する（する）必要（ひつよう）はない（ない）。完全無欠（かんぜんむけつ）のコード（コード）がある（ある）。人類（じんるい）も天然（てんねん）も完全無欠（かんぜんむけつ）のコード（コード）で出来（でき）て

いる。量子も使っているのだ。それこそ場である。場の通訳を通せば人間はありとあらゆるありとあらゆると双方向でコンタクト出来る。

相互理解のその方法は必要選択の不要排除である。意味が分かるかどうかはもととも、理解していない、分からないから、分からないを消して、残りの分かり合えるを生み出すことだ。全くないものは実在しない。場を通訳に使うには場になければならない。場にあるかないかが通訳出来る出来ないを決める。観念上にしか存在しないものを場は通訳出来ない。だがここにコミュニケーションの奥義がある。全くないならイメージさえ存在しない。何かをイメージすればもとがあつたはずだ。それを漉しだす。

ビジョンやイメージを繰り返す。閃いたときにはもう忘れてるかもしれない。思い出せないかもしれない。しかしそこで塵も積もれば山となる。それが理解を生み出す。最初は場とうまく連動出来ないかもしれない。しかし、やがて塵も積もれば山となる。理解出来るようになる。

生物質量で知性生命精神が行うのは、好ましいを選択で要らないを排除である。酸素を取り込み二酸化炭素を出す、栄養を取入れ老廃物を出す、必要が出れば選択、不要が出れば排除だ。ビジョンやイメージを篩にかけて目的のビジョンやイメージをより分ける。

発電が起きているときの量子の振る舞いで人体が量子的に高エネルギー化する。発電が起こる時、共鳴が起きて送受信が起きる。量子が場が力に吹出し力が場に吸込まれる発電でなければならぬ。

量子が場力を結ぶなら人間の意識の根源はどこにあるのか。場の本体の意志が力に反映されるなら、神経を流れる電気信号が意識か、細胞一個一個や量子の一個一個自身に意識

はあるのか。じつはこの問題は言葉の問題であり、時空の認識の仕方に致命的欠陥がある
と解らないからだ。それが科学者や宗教家が有効な超能力開発法を開発出来ない理由だ。
神霊と物質は対立する存在だ。調和できない。方向上下左右前後一致は観念上存在して
も実際には存在しないように科学的真理的宗教的原理は表現上は存在しても存在しない。
今まで有史以降、別室は幻を求めてきた。存在しないのに求めるから欲心から望み叶え給
へなのだ。

量子が意識を持つか持たないかは物質ではないが、神霊ではありえる。神霊界は物質界
の背後にある。当然、神霊界が存在しても物質界の量子とは反応しない。神霊と物質は、
相互作用しないからだ。これでは神霊が精神と相互作用しても物質界ではその作用は観察
されない。神霊界が有っても物質界とは関係ないから量子は意識を持たないし伝達するこ
ともない。量子は物質界にあり物質界に神霊はない。物質界に神霊元子は存在しない。
だが場に力の原型があると考えれば場では力より進んだ宗教や科学を人間は持ち偉大な
文明が栄え、その文明が宇宙を開闢した。場は力を援助しいずれは力は進化して場と融合
する。場と力は同じ構成要素で出来ている。場も力も量子と量子が作用する時空からなり
分子と原子のように力のほうが大きく場のほうが小さい。力は進化して場と寸分違わぬ場
の原型を実現し場と共鳴臨界に達し区別はなくなり場力は融合する。

生物質量では量子は精神と相互作用する場合としない場合がある。人間は蛍光灯をつけ
たり消したり出来るように相互作用をさせたりさせなかったり出来る。力と力では物質の
ように精神と量子は相互作用しない。観念でイメージして念じて何も起こらない。理由
は観念は実在しないからだ。だが力から場を経由すると場に有る物どうしが影響し合いそ

力が力に反映する。場が判断すれば場から力に働きかける。それで力に変化が生じる。力が場に働きかけ場が合点承認すれば決済が完了し結果が力に出る。

相互作用をするしないを決めるのは場力共鳴腸脳発電の入り切りだ。ここが味噌。神霊と物質ではこのようなアザ二進論の原理はない。互いに対立する。だがこの考えではアザ二進論の切り替え原理が成り立ち、しかも完全なる円満に調和する。

力で解決出来なくても場から見れば一目瞭然。道に迷つてもヘリコプターで空から見ればそこを右とか直進とか道のりが一目で分かるから的確な助言が出来る。場から見れば力を良いように持つていける。そのためには力が場の本体と心を通わせ場力の連絡を良好に保つ必要がある。

場はどこにあるのか。四次元時空結合体の外側には宇宙開闢から宇宙の晴れ上がりまでの中性微粒子の雲が広がる。その外側が場だ。宇宙開闢から宇宙の晴れ上がりまでの名残の中性微粒子の雲が広がり、その内側に四次元時空結合体が広がる。そこが力だ。そして宇宙の中心がゼロセンチであり。そのゼロセンチの宇宙の中心の向こう側が場だ。

四次元時空結合体から中性微粒子の雲を通して場には行けない。四次元時空結合体には継ぎ目がないから場に行けない。力から場には行けない。しかし力が場と同様あるいは場より本来あるべき姿に共鳴臨界すれば場に行ける。

ゼロセンチの向こうで硝子張りの向こうから場は力が丸見え。力で、場が見えないから誰にも知られていない積みもりでも場に隠れて何も出来ない。それが悪を抑止する。それは時空間に記録されている。過ぎ去った過去は無くなるのではない。時空間に地層のように蓄積されていく。それを化石を掘り出し復元できるように再生することが出来る。それは

時空を写す鏡だ。三次元立体テレビだ。時空を再現できる。徹しの技術だ。

こういったことはいわゆる超能力とよばれる分野だ。想念動力、以心伝心、念写、スプーン曲げ、予知、過去視、など。これは神霊や物質では原理的に扱えない。神霊界が有つても物質界では神霊は物質に作用しないことになるからだ。宗教家や現役超能力者がなんと言おうと神霊が物質と相互作用することはない。物質であるこの世に神霊はない。これは当然だ。それが神霊と物質の関係だ。

だが場で見ればそう言つたことは当たり前である。力ではあり得なくても場の介入で力を最適化するのだと考へれば起こり得る。

精神も生命も知性も生物質量も文明も惑星も超銀河団もあらゆるすべては量子の作用に行き着く。量子の働きはスイッチが有る無いとその入り切りだ。脳も意識も行き着く先は量子のスイッチの入り切りだ。だが量子を場と切り離す物質では熱力学の第二法則だが、場の介入が秩序や思索を醸すから宇宙は混沌には成らないで、実在する無限と誤差の無い完全完成に向かうのだ。臨界相転移場力共鳴腸脳発電が完全完成確定性原理だ。

量子の作用はミクロやマクロだけに現れるのではない。人間が量子を日常でその能力を使えば通常の人間サイズでも現れる。神通力とか神法導術とか加持祈祷とか言われた、その手の能力は先史の時代では誰でも使える当たり前だった。使えないほうが珍しい。使えないと言ふことは完全完成確定性原理が使えない、臨界相転移場力共鳴腸脳発電が出来ないと言ふことだ。

量子にはウェイブの波動とパリティーの粒子とエフェクトの相互作用の三つの作用がある。量子自体はそれ自身で波動にも粒子にもなる。量子自体は波動と粒子の相互作用の現

れた。量子自身と相互作用と波動と粒子のこの関係が人体の発電システムの関係に成っている。人体と量子の関係は人体自身が一つの量子である。量子は量子自身と量子を構成する三つの作用で成り立つ。これが発電を支える。

場の本体と力の肉体で共鳴が起こる。量子が場の支えで構成されるように人体も場の支えで構成される。量子が場に支えられた三つの作用と本体から成るように、人体の場の支えで三つの作用を行う三箇所と人体自身で共鳴が起こる。腸脳発電は神経回路が場の支える共鳴回路を構成する事で起こる。

共鳴回路は送受信回路だ。波動送受信機や粒子送受信機や相互作用送受信機、つまり、波動送受信神経回路や粒子送受信神経回路や相互作用送受信神経回路からなる。それと、人体でセットになる。肉体は量子と相似相だ。

量子呼吸

零点振動、トンネル効果、対発生、対消滅は時空が量子を代謝しているのだが、触覚で無限を見えないから知性や生命や精神の作用が見えていないから物質と言う無限の存在にしか成らないのだ。それは摩擦が原因だ。物質は何でも出来るといふが出来ないことがある。それは場と一致することである。摩擦や物質は円を考えると円の中が力が場と一致する領域であるとなると、円周が場の原型と一致するなら、中心に近づけば場の原型より本来あるべき姿よりもつよい姿に成っている。

場力共鳴であるならば円周の中で自由に何でも出来て場力と一致がなりえるが、円周に

栓をして共鳴を遮断してそれで押さえつけるから場力摩擦はこの円周の中で場力が一致することが無い。物質の科学がしているのはこれだ。この蓋の栓が人類が超えられない障壁だ。この宿便を取り去らないと便秘が治らない。

意識が時空に発芽しない理由だ。自分の原型が発芽しない理由だ。地球の科学者が知性や生命や精神が量子と作用する条件が見つけれないのは量子がもうすでに知性生命精神と作用しているのだと認めないからだ。栓を外すことが出来ないからだ。外すことが出来さえすれば、アア、そうだったのかと分かるのだが。

量子自体に知性生命精神があるから、場力共鳴された量子は腸脳で情報やエネルギーを持った生体電気に変換するように、装置として量子呼吸を起し腸脳力変換する装置の開発が成りえる。知性生命精神は場の領域で制御され、それが力で量子として現れる。場では力に作用するためのさまざまな試みがなされている。力でいろいろ試せば場の作用が分かるはずだ。場では力より基本的に完全で力で迷うことも場では相対的に解決している。そこでその差の分が力に吹出し場が吸込む。

携帯情報端末も腸脳も電子雲や原子核から構成されているように、すべては量子で出来ているから、自然の量子の知性生命精神のコードと一致させれば、携帯情報端末や腸脳は量子呼吸を経由して通信交通できるのだ。特別な装置はいらない。天然自然がシステムを貸してくれる。石や土器、岩笛などでもコンピュータや携帯電話やGPSやインターネットトとしてなりえるのだ。

天然自然にあるもので量子呼吸を起すには座を使う。座は座でも八尋殿である。それと八尋殿と連動したヒヒイロカネで出来た装置である。それが石笛や土器である。量子本体

としての座本体の神奈備、粒子は太陽石で、波動は方位石で、相互作用には鏡石を配置する。天然自然にある人体が行う量子呼吸も八尋殿である。量子本体としての人体、粒子は間脳内液、波動は視床下部、相互作用は太陽神経叢である。おおくの八尋殿の基本はこのように出来ている。

量子呼吸装置を作る上で肝要なことは自然とリンクするコードを開発する必要がある。無めと言いう事実である。なぜなら人類が逆立ちしたつて適いそうもない完全無欠のコードが目の前にあるからだ。完璧な自然のコードの前に人類はタジタジに成るしかない。このコードを使えばいいのだ。

量子呼吸装置の開発は自然のコードを人が演算出来るかどうかにかかっている。八尋殿やヒヒロカネの岩笛や土器のPDAやGPSもこの自然のコードを知っていたから作れたのだ。だから古代の遺跡は一見すると只の自然にしか見えないほど自然と溶け込んでいく。古代では美しい自然であることがステイタスシンボルであったのだ。明らかに人工の産物としか見えないというのはナンセンスであった。

自然を動かすコードは知性や生命や精神そのものである。知性生命精神は万類共通である。従って量子呼吸は知性生命精神そのものである。石も、土器も、馬、牛、車も人間、知性生命精神自体は共通であるから人間の意識も量子呼吸で万物と通信交通できる。自然と一体化しない理由は摩擦が接点に蓋をするからだ。人間が人間自身の知性を阻害しているからだ。

人間が場と手を繋ぐには、実在する無限から見ればどう見えるかを人間が思考するかである。場は見えている。自然はすべて知っている。そこから考える。文明や刑法も、場のほ

うが人間より、よほど深く理解している。森羅万象に隠し立ては出来ない。自然のコードに違反することが、罪であり、その罪は罰を内在している。

量子呼吸を軽じるものは、もうすでに大地の有り難みや、清水の温かみを知らない。命の有り難みを失うと言う罰を受けている。すきんだ人生を送るのだ。生ける輝きを知るものなら量子呼吸を理解できる。

天然自然は全知全能の万能で出来ていて、その構造は時空の場と力の呼吸で成り立っている。場は相対的に完全であり、力は相対的に不完全であり、力に完全成分を蓄積していく文明が本当の文明である。天然自然成分を消費する文明は意識が時空に発芽していない不完全未完成な文明だ。時空を超え宇宙を循環する量子を呼吸する方法は自然に任せるしかない。人間も自然の内にあり、人類は意識を使い場を見れる。

これが癒しである。ゼロセンチが無いと言う事実は継ぎ目が無い。場は力より根源的で活動的だと言うことだ。粗い自分を洗い、しつとりとねばつとした自分に落ち着く。泥玉が海に溶けて泥の衣を捨て海水と融合する。それが量子呼吸だ。すべては量子から出来るから、すべては知性生命精神を持つのだ。

知性生命精神は自然のコードで出来ている。人間の知性生命精神も自然のコードで出来ているが人間は人間が作ったコードで読み書きしていてすべてがすべてであると見えていない。人類が癒されない理由は人間の作りのたまたまのばかりで暮らすうちに老廃物ばかりに成ってしまい、新鮮な栄養が枯渇してしまったためにストレスに苛まれ栄養不足のためにイライラしているのだ。それは時空にドロツととろけるしか処方はない。

腸脳発電

これは人体とその腸と脳で、太陽神経叢や間脳に対応している。量子本体が人体。波動が視床下部。粒子が間脳内液。相互作用が太陽神経叢である。機械も生き物も原理は同じで人体の脳の神経のシナプスの入り切りもコンピュータの回路の入り切りも同じだが人間に文明を築くことが出来るのに猿に文明を築けないのは、臨界相転移場力共鳴腸脳発電を起こすこの仕組みがあるからだ。コンピュータと脳の違いは実在する無限と連動する仕組みがあるかないかである。

コンピュータでは配線を通れる電子の流れを支配することによって計算している。だがそれはプログラム以上のことはしない。無限と連動するには電子が場と連動し自分で判断する電子が配線の中を自由に動く回路の開発がある。とつすると脳ではシナプスを流れるインパルスは自分で神経繊維を選んでいる。腸脳が場と連動しインパルスがどのシナプスを選ぶか自分で判断するから実在する無限の可能性が生じる。

共鳴機構は本体と波動作用と粒子作用と相互作用で成り立つ。自然界では量子や脳だけではなく三極一対でいろいろな信号を共鳴している。粒子作用送受信から相互作用送受信で、そこから量子本体送受信で波動作用送受信へ、そこから粒子作用送受信に戻る、構造だ。場力共鳴が腸脳発電を起こす、間脳内液から太陽神経叢へ、そこから人体へ、さらに間脳視床下部から間脳内液に戻る制御システムがある。

脳神経のシナプスの中を自由にインパルスが動くのは信号を腸脳がコントロールするかだ。量子が自由に動き場が力を制御するには、量子の自由を保障するには、量子自身に

判断させるには、腸脳力がインパルスを制御するには、腸脳回路が量子を制御するには、この機能がいろいろある。

場力共鳴の腸脳発電の間脳内液と視床下部と太陽神経叢と人体が起こす発電は場力共鳴であり、この発電は体内の代謝を使うことなくインパルスを生み出し、生み出されたインパルスは自分自身に由来する脳内神経を循環する。発電された生体電気は身体を健全にし力の代謝を場の原型に近づけて行く。意識はこの上ない快楽を味わう。

三極一対が成らねば共鳴は起きない。場力の送受信を起こすには吹出すと吸込むのバランスだ。呼吸は吸っただけ吐く。吐いただけ吸う。吐き出しただけ吸込まねばならない。発電は電圧で電子を押して電流を起こし抵抗が熱を生み電圧が下がる。

しかし発電機から末端まで行くのにロスがないほうがいい。あるいは末端へ行くと電流が多くなるほうがいい。回路は電子が電源から出て回路を循環し又電源に戻る循環がないと動かない。発電所から出た電気は家庭を巡りまた発電所に戻る。コンセントは必ず出つ張りがある。電気が出て来る極と出て行く極の二つある。

場は完全だ。時空間を越えて場と力を繋ぐ。完全である場の栄養が吹出し力の老廃物を吸込んでいく。意識や人格は完全を志向する。情報を持ったエネルギーや、エネルギーを制御する情報が起こる。閃きが起こるとき脳はフル回転。脳をフル回転させれば閃きが起こる。フル回転させるのに力の代謝を使つては長続きしない。一瞬だけだ。力では栄養も情報もエネルギーも有限で無限ではない。使えば無くなり疲労物質が体内に残る。

だが共鳴状態では量子的に栄養も情報もエネルギーも供給は無限量だ。発電は量子的に神経回路で起きて量子的に発生する老廃物も量子的に場が吸い込んでしまう。力の代謝を

使うことのない量子的な腸脳発電は直接疲労物質を作ること無く代謝を動かす。

自然界ではこの手の三極一対の共鳴システムが沢山ある。この手のシステムで自然界は動く。座がそうだ。動植物の体内でみな働いている。自然界が天然成分を蓄積するこの

システムは場が力に吹き出し力が場に吸込まれる。この呼吸を旺盛にすると元気になる。

有限の力が無限と融合するにはこのシステムの構築の仕方だ。

太陽神経叢から間脳へ量子が流れるエネルギー系と人体から視床下部で生体情報エネルギーに変換されて非接触型接続の原理で間脳内液に戻るインフォメイション系。バキユー

ムが吹出しストロンチウムで吸込んでいるパワー型、そしてアトムをカタパルトで押出しコンチニウムが取込んで、力をトランスして場に返し循環するピク型などがある。

間脳内液と太陽神経叢の醸すエネルギー。人体と視床下部の醸す情報。場力両輪咲き誇る中、腸脳発電が起こる。実際に間脳内液は超流体を起こし、まつ黒のバキユームが現れる。人体が発電をするには量子的な発電回路が起動しなければならない。

愛の臨界相転移

宇宙と時空の進化とは臨界相転移

今から遠い昔、場が力を造った。無から火の玉が生じ大爆発したという。それをビックバンと呼んでいる。それは時空の臨界相転移である。臨界相転移は宇宙創生が臨界大膨張である。やがて宇宙が完成し宇宙移民が始まる。場は力に流れ込み蓄積される。力のこの宇宙が成長しやがて場と拮抗する。そうすると場と力が融合する。それを臨界大収縮という。

そのためには吹出口と吸込口を整備して場の栄養を取込み、力の老廃物を排出する必要がある。完全なる理想的な吹出口が臨界小膨張であり吸込口が臨界小収縮である。それが人間から惑星、太陽系、銀河系、銀河団、超銀河団と発展していくと、臨界中膨張になって臨界中収縮になる。

時空間の構造には元になるエリア88があるように場力共鳴臨界の元になる男女合体、陰陽合致がある。場が自律的に吹出してくる吹出口の理想は理想的な送受信機である。それは理想的なカップル。理想の相思相愛の夫婦が原型になる。元々、霊止は、女男留である。陰陽の理想は凡夫の大欲であるべきだ。よく英雄が美女を救い夫婦になる話が沢山ある。それは男女が試練に合い乗り越えて行く夫婦の雛形である。

宇宙ネットワークはコンピュータネットワークで、宇宙に普く量子循環のネットである。その循環は未だに自律的な相互作用に至ってはいない。臨界とは相互作用が連鎖反応を生み連鎖反応が相互作用を生み、繰り返されることである。宇宙文明のコンピュータは人工知能であるが、自分で意思を持った生命体ではない。宇宙文明は精神感應装置を持ち

電子頭脳を持ちながら、純粋な研究開発能力自律的ネットの構築には至っていない。

宇宙の進化は真善美愛の方向に向かつてきたが地球人を見れば人は悪意を持っていることが分かる。地球で人類は種としていまだに定まっていない。あらゆるすべての中で役割がいまだに不明瞭である。地球で種としての霊止が進化を起こすには天然自然の中で役割がはつきりする必要がある。

霊止として知性の役割をハッキリ出来ないのは宇宙の歴史的物理機構が研究されていないからだ。星から星へは宇宙ネットワークが張り巡らされたが場と力のネットは不完全であり未完成である。それはバキュームの構造が未だによく分からないことに起因しているのだ。場の構造を解析するだけのハッキリとしたデータがないことが原因だ。

それは時空間代謝免疫生殖構造の解明である。人には生老病死があるように時空には病いもある。妖幻坊だ。そもそも免疫や代謝や生殖が好調なら病気にはならない。しかしストレスや悪食で、体調を崩すと病いになる。だが単に健康とは病いではない状態としても健康の定義とは何か定義出来ない。知性と精神が脳細胞の活動であるとしても、デオキシリボ核酸は生命の設計図であり、細胞は生命の最小単位であるとしても、それで健康や喜びの定義を成していない。

ゼロセンチとは無いことであるがゼロセンチの向こう側があるとは分かっても手も足も出せない。だが場と力は重なり共鳴によって内部触覚で結ばれている。人類の進化は場にある共鳴構造を力に構築することによっておこる。霊止は力の中で際立った存在である。文明を作り、宇宙船もコンピュータも作り、様々な共鳴装置を開発した。だが霊止自身が特別な存在である。霊止は霊止自身を共鳴装置にすることも出来る。

靈止の進化は靈止自身を共鳴装置として共鳴機構そのものの中に繰り込んでしまうことである。靈止の存在自体が森羅万象と誤差が無いであるにしようことである。健康とは完全無欠と全く同じであるにしようことである。それには装置を使うことも必要であるが基本的に靈止自身で完結すべきである。

場との融合は靈止自身で完結すべきであるが、単体の一人で行うよりも子孫を残すことの出来る夫婦で融合したほうが理想である。夫婦が生殖場力融合すれば子孫に愛が満たされる。一人の場力融合では生殖融合正直は成せまい。それより男女合致のほうがよいと思われる。

単体で共鳴しても吹出口と吸込口が双極であるが、夫婦ならば男女同士が吹出口単極と吸込口単極になる。一人で共鳴するならば地磁気のように南極から吹出した磁気が北極に吸込まれるようだ。男女の仲なら男性自身で軸性スピンドして女性自身で軸性スピンドして、夫婦で極性スピンド出来る。

そういった愛は宇宙に満ちている。宇宙文明では当たり前である。それだけでは共鳴の連鎖反応は起きない。臨界相転移が起きない。なぜか。臨界相転移には時空の代謝や免疫だけでは足りないからだ。時空の生殖も必要なのだ。生殖には融合と分裂が欠かせない。生殖細胞は減数分裂を経て精子と卵子になりやがて融合し受精して新たな生命になる。

臨界相転移はこの生殖に当たる。場の領域で減数分裂を経た精子と卵子が融合しこの力が誕生した。受精が臨界大膨張である。場の領域で時空間の元になった個体のレベルでの減数分裂に成功した女性こそ伝説の救世主であり、その伝説の救世主親衛隊隊長こそ個体のレベルで減数分裂に成功した男性であり伝説の創造主である。臨界相転移のためには力

の領域での減数分裂を成し遂げた男性と女性がいるのだ。伝説で英雄が怪物を倒し美女を救い娶る話はこの共鳴の生殖の奥義が伝わって象徴として繰り返し再現されたのだ。

量子呼吸をするのに量子呼吸を消費するが取込んだ量子呼吸が消費した量子呼吸よりも上回っていれば蓄積される。これが代謝である。場の原型と違えば消えていく。より場の原型に近づけば残っていく。これが免疫である。減数分裂の試練に、打ち勝った生殖細胞だけに受精が許される。これが生殖である。この三つが個体のレベルで揃うと臨界相転移が成せる。

これぞ進化である。ならば臨界小膨張と臨界小収縮とは、時空間減数分裂の恐怖の試練に打ち勝った夫婦が、個体のレベルの精子と卵子になって融合し個体のレベルで受精卵になることだ。それが成せばその霊止の共鳴を装置として再現できる。臨界相転移が起き始めると時空と宇宙が混じり合い場と力が交じり合う。それが宇宙文明に広まっていくと臨界中膨張と臨界中収縮になる。

宇宙移民が始まり惑星が成長する。その住民はその惑星の時空を取り込み、場の原型と寸分違わぬように惑星を進化させやがて宇宙文明に加盟する。どの惑星も基本的に変わらないように時空も宇宙も基本的に変わらない。宇宙も成長し時空を取り込み時空の原型と寸分違わぬように成長し共鳴を起こす。宇宙文明はアトムオルガンイザーインヤンジャーカーテである。臨界小膨張は理想的な吹出口でありアトムに最適である。臨界小膨張が広まれば宇宙文明はごぞつて臨界小膨張をアトムに用いるだろう。

吹出したら吸込む。吸込むは押込むである。それは加压であり加速であるからカタパルトである。反電場素粒子加速器は場力共鳴加速器である。力に残る場の成分は、カタパル

トによつてヒヒロカネになる。宇宙文明ではより優秀な小型で強力なアトム発生装置を渴望している。それはアトムの性能がカタパルトの性能を決めるからだ。

従来のアトムオルガナイザーインジャンジャーカルテに無かつた場力共鳴による発振をもたらず。今まで宇宙文明のアトムオルガナイザーインジャンジャーカルテに自律的発振能力はない。臨界小膨張をアトムに用いればカタパルトへ吸込まれたアトムが、場と力の間を自由に自律的循環をしはじめる。それは自律神経のようである。宇宙の領域でしかなかつたアトムオルガナイザーインジャンジャーカルテが時空をも含むアライブアトムオルガナイザーインジャンジャーカルテに進化する。

理想的なカタパルトが臨界小収縮である。宇宙文明に臨界小膨張が広まれば臨界小収縮が起こせるようになる。宇宙文明に臨界中膨張が広まれば臨界中収縮が起こせるようになる。臨界膨張と臨界収縮はセットになっている。臨界膨張の成功は臨界収縮の開発につながる。宇宙には個性的でユニークな臨界相転移が開発されていくことになる。

宇宙文明ではどのようなアトムオルガナイザーインジャンジャーカルテが使われているのであろうか。宇宙文明の生活を考慮してみる。基本的に地球と同じである。動力源が在つてエネルギーを供給し熱や明かりになりコンピュータを動かしエンジンが乗り物を動かしている。畑や牧場も養殖もある。店もあれば病院もある。

その違いは地球では摩天楼とお金だが宇宙文明では八尋殿とヒヒロカネである。心霊の例外が物質で、物質の例外が心霊と物質は全く関係がないことになる。それでは科学者と宗教家は論争を続け收拾がつかない。多くの人々は戦争原理より平和原理のほうがよい。だがそれには戦争とは平和とは何かを解明しなければならない。多くの民

はこの解明を科学者や宗教家に期待しているが科学者宗教家哲学者、政治家軍人経営者も誰も期待に答えない。

この答えは、進化の段階で、重大な意味を持つ。この答えは生物質量だ。地球の産業は基本的に電子と光子で成り立つ。電子や光子を用いた電子頭脳を作れば地球の産業をそのまま使える。だからそれを始めから作る必要はない。何故なら始めからあるからだ。それが生物質量だ。地球も地球人も始めから完全だった。それがアトムオルガナイザーインヤンジャーカルテだ。ようするに森羅万象と誤差がないようにすることである。

それこそが八尋殿にヒヒロカネ、霊と座、カタカムナに手児奈である。別に文明をやり直す必要もない。大戦でぶつ壊して贖罪の火の玉で清める必要もない。ただ生物質量にするだけだ。それは具体的にどういうことか。表田にしてみれば一目瞭然。

改革を叫んでもうまうまいかない。肥田春充も檜崎皐月も苦戦し王仁や西郷隆盛も苦戦しアダムスキーもホビも苦戦し誰にも出来ない。何故か、それは別室の存在である。三五教の存在である。別室は表に出ず裏から操る。それが場と誤差が無い分だけ成功した。しかし今その限界が表面化しつつある。巨大な国際ネットワークの影の政府の連合体が地球の覇権を狙っているという。それは三五教の影に過ぎない。

三五教がこの良の地で良線の覇権を目指すから、バラモン教やウラル教やウラナイ教が人類の支配を目指すのだ。三五教は地球の良のアトムオルガナイザーインヤンジャーカルテの管理を画策する、だから国際結社が世界のライフラインを支配する。

縄文の終焉と共に国造りを目指した別室は宇宙文明の中にいた敵のスパイの獅子身中の虫に欺かれ亡国の選択を繰り返した。月人の中にも悪人がいたのだ。宇宙文明に間違いは

ないと過信し平伏しハイハイと従った結果、妖幻坊に誑かされ時空間病原体に犯されてしまった。

妖幻坊の手口はお金と摩天楼に尽きる。これは地球人の日常生活であるがそれが地球を病いにする。病気とは単に健康ではないのことはない。病気とは完全無欠と誤差があることである。有史以降の科学や宗教が生み出したお金や摩天楼が地球を病気にした。それは当たり前だ。有史以降の科学者や宗教家はお金や摩天楼で科学の殿堂や宗教団体の段を作った。それが誤差だ。だから病気になるのだ。

命が病んで心も体も蝕まれても、我慢するしかない。皆、おかしいと感じつつ、誰もそのことを説明できない。この謎を解ける誰かが現れるのを待ち続けるので精一杯というのが現状である。ところが意外にも簡単にこの謎は解ける。時空間免疫代謝生殖のことだ。健康と病気の関係は誤差がないのかあるのかの違いだ。誤差の正体とは実在する兇党界や妖幻坊のことである。

日本も亜米利加も露西亜も時空間免疫代謝生殖しか妖幻坊に對抗できないことを軽く見て、そのため兇党界の仕込み杖の嘘の報告を信用して生命力が萎えても大したことないと思ひ、地球が死に掛けている。かつて二代目常世彦常世姫は直霊が強かったから国祖を凌ぐことが出来た、だが省みる作用が強いことが野心を抑え国祖をご引退に追い込めない。そこで兇党界は断食断水の行をさせ身魂を弱体化し兇党界の容れ物にすることに成功し蝕んで行った。

このことは人間が正直し健康であれば妖幻坊は手も足も出せないのだ。兇党界は悪意を持たぬ善人には取り憑けない。そこで人心を悪化させようとする。悪人に悪知恵を付ける

のだ。それには人々が争うほうがよい。そこで欲心を起こさせ発心を衰退させる。そのためには発心の共鳴による調和を破壊させる。それには言霊やヒイロカネや八尋殿や霊や座の天敵を使わせる必要がある。お金に摩天楼だ。

貨幣経済の原動力は高天原ではない。競争原理やお金や摩天楼に高天原は介入しないからだ。では何が原動力なのか。人民の人民による人民のための摩擦による支配だ。欲心と煩惱だ。人民の人民による人民のための政治は結果論から言えば森羅万象の時空や宇宙を循環するカタカムナや手児奈や言霊がない。だから兇党界が介入してくる。人民の人民による人民のための政治や貨幣経済の原動力は古の蛇の妖幻坊だ。

腸脳発電と臨界相転移

その日その時のその場所は複数存在しない。一個ある。それ以外はない。その日その時の場所は現在過去未来に一個しかない。確率一がある。それ以外は確率ゼロだ。過去や未来においても確率一があると確率ゼロしかない。実際にはゼロと一しかない。二、三、と数えるのは概念であり実在ではない。従って確率何パーセントというのは、概念上しか存在しない。現在や過去や未来の確率一は実在する無限との整合性である。

今、ここにあるのは確率一である。その確率一は未来における出来事の確率一と連なっている。そこで今を変えれば未来も変わる。しかし未来においてどう変わるかは確率一との連なりから何がどうなるかが分かる。

未来のその日その時のその場所の自分自身は複数存在しない。未来のその日その時のそ

の場所における自分自身の選択肢は一個しかない。様々な可能性があつてもその時のその場所の自分自身はそこにいる自分自身だけだ。いまこの自分はいまここに居るだけで、複数は存在しない。それならば、一時間後、十年後、十世先、百世先の自分も複数居ない。確率は連続であり、痕跡を追跡できる。この世の事象はすべては確率一があるとそれ以外は確率ゼロの連続である。

ゼロセンチの向こうで今、起きている何か。その何かをどうすれば力の私たちが知ることが出来るか。ゼロセンチの向こう側が分かれば私たちは完全無欠を知ることが出来る。実在する無限は、その日その時その場所のある、その日その時その場所に実在する確率一だ。それ以外は確率ゼロだ。それは実在する無限の過去から続いてきて、無限の未来に続いていく。永遠の今がその接点であり、無限の過去から無限の未来にわたり、その日その時その場所に実在する確率一、それ以外は確率ゼロが永遠に続いていく。

物質は実在する有限であり実在する有限は実在しない。心霊は実在しない無限で実在しない有限で実在しない無限も実在しない無限も実在しない。実際に、実在するのは実在する無限だけだ。それが確率一だ。実在しない無限も実在しない有限も実在する有限も実際に無限である確率一以外である確率ゼロである。

心霊を祭る宗教団体の団は実在しない無限と実在しない有限を人々に拝ませている。いくら念じても実在しない以上、瓢箪から駒を期待しても待ちぼうけである。

実在する有限を研究する物質の科学は実在する無限を見ないのだ。実在する有限を研究し経験を蓄積し学習しデータベースを構築するのであるならば、それは科学ではない。物教だ。科学と呼ばれるものの元は化学だ。化学は錬金術から始まった。化学は化け

学ともいう。化け学は実在する有限を研究する。

科学という用語自体は今だ定義されていない。科学と言う用語自体の本来の意味を考えれば実在する無限を研究するということになる。それは未発見の未知に完全に対応する学術体系になる。それは場と力の学術体系になるから場力学である。科学とは、正確には、実在する無限を研究する未発見の未知に完全に対応する学術体系で場力学の錬金術になる。

未発見の未知に対応出来る無力線は場だ。不測の事態に対応出来る有力線は力だ。なぜ無力線は未発見の未知に対応出来るか。未発見の未知つまり不測の事態が何故生じるか。その時そこでどうなるどうなっているのが分かれば不測の事態では無い。予定外のことでも前もって知っていれば不測の事態ではない。

不測の事態に遭遇しても、実在する無限から連なる確率一それ以外は確率ゼロであるから、確率一だけピッキングできるから、未発見の未知に対処できるようになる。未発見の未知は対処の仕方が解らない。しかし確率一が手に取るようにリアルなら確率一だけ選択していれば対処できる。確率何パーセントは経験を蓄積し学習しデータベース化して推論することである。だからデータのない未発見の未知に対処できない。

全知全能は全知全能なるがゆえに善悪正邪共に誤ることが無い。万能は万能なるが故に万能を万能出来る。天は天自身で天を決定できる。自然は自然自身で完結し自ら自然を行える故に不測の事態がない。森羅万象は自然と誤差がない故に未発見の未知に完全に対応する。天然は天然を天然自身で天然することが実在する無限の原動力であり未発見の未知に完全に対応可能にしている。未発見の未知に完全に対応する生物質量の科学は場力学で

あり場力共鳴量子呼吸腸脳発電である。

不確定性原理や不完全性原理や常温常圧常エネルギーで生命は自然発生しないや元素は自然転換しないという考えでは、生命の自然発生の条件や元素の自然転換の条件を考えない。それでは天祐神助の条件を考えない宇宙論や時空の認識になる。実在する無限を考慮する先史の伝統を潰して出来たからこうなつたのだ。

基礎代謝によって発電している。発電された電気が細胞を支える。もし細胞が自分で、基礎代謝によらない発電を実現すれば発電された電気が基礎代謝をリフレッシュすることになる。それが腸脳発電である。

この生命幾何学による共鳴による調和こそ発電に最適な栄養である。場力共鳴が起これば量子は場力を循環し腸から吹出し脳に吸込まれる量子呼吸が起きて腸脳発電が起こる。この生命幾何学が起こす腸脳発電こそ生体に理想的な栄養である。

神経細胞は二十歳を過ぎると死んでいく。大人になると神経細胞は細胞分裂をして増えないといわれている。ホルモンや神経性物質を作るには神経が十分に発電する必要があるのだが食べ物による栄養の摂取による生体発電では十分な発電による充電が成されない。

そこで神経はバッテリー切れを起こし死んでしまうのだ。生殖で充電されて以来、充電されずにいるからバッテリー切れを起こすのだ。それならば腸脳発電による充電が成されれば神経細胞は増殖するはずだ。

腸脳発電が発電し送電して充電がおこると、人間にどのような変化が起こるのか。まず若返る。老化は生体発電の低下が大きく関わる。加齢が老化を引き起こすが、加齢が起きても腸脳発電が起これば老化は起きない。腸脳発電は物凄い長寿を齎し、永遠に続く青春

を齎す。

地球の人間は実在する無限の活動した結果の意識の生みだした老廃物にすぎない知識を博物している。いくら老廃物を摂取しても栄養にはならない。栄養は、実在する無限だ。人間が摂取した栄養は結果的に生体電気になる。取り分け、神経の発電する電気は人間の動力源である。従って神経の発電能力と送電能力を上げていくことが人間の基本的な性能を決める。生体発電は食べ物から得た栄養以上で送電能力を上げていくことが人間の基本的な性能を決める。生体発電は食べ物から得た栄養以上の発電はしない。

基礎代謝は食べ物から発電する。たくさん食べて、よく運動して、よく寝ればいくらでも発電できるかというところではない。食べられる量には限界がある。食べた以上に発電はできない。生体発電を盛んにしようと良く食べ良く運動し良く寝ても摂取できる食べ物に限られている以上ある程度の発電しか起こせない。神経が十分に発電し送電すれば生体は絶好調である。神経が食べ物以外の栄養で発電することは可能だろうか。

基礎代謝の発電では、加齢と共に細胞の内部でバッテリー切れが起こるから、加齢と共に老化する。老化とは基礎代謝の疲労であり寿命とは基礎代謝の限界である。基礎代謝に頼りきった生活では寿命が短くなる。基礎代謝には限界がある。だから寿命がある。しかし基礎代謝を若返らせることができれば加齢と共に起こる老化を押さえ驚くほどの長寿が実現できる。

量子論や相對論は無が膨張し原始的時空間が出来て宇宙の晴れ上がりで通常空間が出来たと言う。自分はゼロセンチを挟んで同一時間同一空間のあつちとこつちにいる。ゼロセンチの向こう側のあつちとこつちの自分は共鳴によって繋がっている。

輪^わつかがある。通常の輪^わを切^きつて捻^{ひね}つて繋^{つな}ぐとメビウスの輪^わだ。メビウスの輪^わも切^きつて捻^{ひね}りを戻^{もど}して繋^{つな}げば普通の輪^わだ。同じ輪^わでも幾何学的に違^{ちが}う輪^わになる。通常の輪^わは面^{めん}をなぞつていけば表^{おもて}と裏^{うら}が繋^{つな}がることは無いが、メビウスの輪^わは面^{めん}をなぞつていくと表^{おもて}と裏^{うら}をいつたりきたりする。

人間^{にんげん}は幾何学^{きかがく}つまり体位^{たいい}や姿勢^{しせい}でメビウスの輪^わのように場^ばと力^{りき}を循環^{じゅんかん}することが可能^{かのう}になる。人間^{にんげん}は姿勢^{しせい}や体位^{たいい}で場力共鳴^{ばききやうめい}を起こ^{おこ}すことが可能^{かのう}である。共鳴^{きやうめい}による調和^{ちやうわ}は、共鳴^{きやうめい}による調和^{ちやうわ}が出来れば実在^{じつざい}する無限^{むげん}から連なるその日^ひその時^{とき}その場所^{ばしょ}の実在^{じつざい}する確率^{かくりつ}一、それ以外^{いがい}は確率^{かくりつ}ゼロを示^{しめ}すことが出来る。腸脳発電^{ちやうのうはつでん}が出来れば、その日^ひその時^{とき}その場所^{ばしょ}の確率^{かくりつ}一それ以外^{いがい}は確率^{かくりつ}ゼロを知^しることが出来る。

生命幾何学^{せいめいきがく}の構築^{こうちく}はゼロセンチを挟^{はさ}んで、こつちの自分^{じぶん}とあつちの自分^{じぶん}が一致^{いっし}する体位^{たいい}のことである。力^{りき}の自分^{じぶん}は場^ばの自分^{じぶん}と一致^{いっし}し、同一時空間^{どういつじくうかん}に存在^{そんざい}する自分^{じぶん}が、同一時空間^{どういつじくうかん}に自分^{じぶん}として存在^{そんざい}することになる。このときが確率^{かくりつ}一でそれ以外^{いがい}が確率^{かくりつ}ゼロというのだ。未発見^{みはつけん}の未知^{みち}に対処^{たいしよ}するには確率^{かくりつ}一それ以外^{いがい}は確率^{かくりつ}ゼロの構築^{こうちく}である。そのためには、場力共鳴^{ばききやうめい}で量子呼吸^{りやうしこきやう}が起^おこるなら、確率^{かくりつ}一それ以外^{いがい}の確率^{かくりつ}ゼロの量子呼吸^{りやうしこきやう}を検波^{けんぱ}すればよい。

腸脳発電^{ちやうのうはつでん}が起^おきたとき人間^{にんげん}は確率^{かくりつ}一それ以外^{いがい}は確率^{かくりつ}ゼロになつてゐる。このときの頭脳^{ずののう}は確率^{かくりつ}一それ以外^{いがい}は確率^{かくりつ}ゼロの思考冥想^{しやうめい}している。腸脳発電^{ちやうのうはつでん}を制御^{せいぎよ}して冥想^{めいそう}しているときは完全^{かんぜん}なる無念無想^{むねんむそう}の境地^{きやうち}で大脳新皮質^{だいのうしんひしつ}は機械的停止^{きかいてきしやうたい}状態^{きわ}になり冥想^{めいそう}の極^{きわ}みである。思考^{しやう}しているときは大脳新皮質^{だいのうしんひしつ}が最高能率^{さいかうのうりつ}で稼動^{かどう}する。未発見^{みはつけん}の未知^{みち}なる問題^{もんだい}が脳髓^{のうずい}に現^{あらわ}れ、同時にその回答^{かいとう}も脳髓^{のうずい}に映^{うつ}し出^だされる。

訳が分かるは意識が認識することである。意識と言うものが実在する無限の活動の結果に生じた副産物であり、動画は同じでパツパツと連続していかないと、一枚だけとか止まつたままだと静止画と一緒に動画にはならない。意識は意識自体が連続して繋がりが無いと分かるにならない。動画が関連のある静止画の連続であるように訳が分かるは意識の關係する意識自体の繋がりでである。

その意識の繋がりは理想から言うとな無限の過去から今この自分に繋がりが、無限の彼方から来て、無限の未来に繋がりが無限の彼方に広がっていく繋がりがそれ自体が意識であることが理想だ。それは腸脳発電のとき実際になる、このとき人間は靈止になる。

大脳新皮質にとって最高の栄養は腸脳発電である。左脳の大脳新皮質が強く稼動すれば思考の極み、右脳の大脳新皮質が強く活動すれば瞑想の極みである。大脳新皮質を動かすには発電が必要であるが神経細胞の基礎代謝による発電では発電すれば神経細胞が疲弊してしまう。体力を消費する発電では健康にはなれない。基礎代謝による発電だけに頼ることは健康ではない。

心技体は同時に存在し、始めから無限の過去から存在してきた。心と体は同時に存在し片方だけというのは無い。体と言うのは物体であり光速不変の原則に拘束され光速より早く移動できない。しかし心の作用で体の物理的特性を消すことが出来る。

物質は実在する有限である。だから光速不変の原則に従う。だが実在する無限の一部であるから実在する無限の中では、別の領域でもあるその他の領域と相互作用している。死後、意識や記憶が場の本体に帰りまた新たに力の生まれ変わるように、場の本体は力の知性生命精神の作用を温存したまま、力の物理的特性を消し去ることも出来る。また場の

本体は力の知性生命精神の記憶をもとに消し去った物質的特性を力に再現し元通りの物体として再現できる。

このことは場にあるならば、意識やイメージを实体として取り出せる物乞いが出る。量子は実体として存在する時は光速度を超えられないが、精神の作用で実体を消してしまえば光速度の制約を超える。そこで物体の物理的特性を消して精神の作用でイメージした場所に移動し物理的特性を再現して実体として現れることは可能だ。

時間空間的に実在する無限から出発し今こにきて実在する無限に帰る連なりがあつて今ここの永遠の今と繋がり合致する最高の一手しか要らないのだ。様々な多種多様なサービスを提供する沢山の選択肢は煩惱である。煩惱を沢山用意しても煩惱にしかない。実在する無限から連なる一手だけ、その他の選択肢は無い。最高の一手だけを吟味し磨きをかけ、より汎用性のある最高の一手だけがあるというサービスが理想だ。

時間空間的に実在する無限との連なりがあつて、今こに連なつていて、時間空間的に実在する無限に帰っていく連なりがあつて、今こでなすべき最高の一手があつて、その最高の一手を決済の基準にしてしまえばそれが完全雇用になる。実在する無限との連なりで自分は何をなすべきか見えてくる。運転手だったり、プログラマーだったり、専業主婦だったりする。最高の一手はあるのですから実在する無限との連なりから自分の職業が見えてくる。実在する無限との連なりをより最高の一手にする職業に就けばよいのだ。

職業選択の自由があるのだから職業を選べるし作ることも出来る。それは自分が最高の一手の実現を提供する職業に就けばよいということで、手や足や耳や目があるように自分の役目は実在する無限との連なりの中から最高の職業があるのだ。その最高の一手を実現

する職業に就けばよいのだ。

腸脳発電は、基礎代謝の制約や、熱力学の第二法則の制約や、偶然と妥協と突然変異と自然淘汰の産物が進化であると言うダーウィンの進化論の制約や、常温常圧常エネルギーで元素は自然転換しないと言う制約や、質量エネルギー保存法則の制約や、お金と摩天楼の制約から、人間を開放する。腸脳発電は、人類万類の定義や起源や、宇宙や時空の定義や起源や、文字や言葉の定義や起源や、物質の定義や起源や、宇宙や時空の定義や起源や、知性生命精神の定義と起源や、神の定義や起源を明確に人類に示す。

地球でも実際に時空文明や宇宙文明を実感できる。それは宇宙と時空を知れば出来る。例えば健康と病気とは何か。健康は森羅万象と誤差が無いであり病気とは森羅万象と誤差があるだ。実際の健康は腸脳発電である。病気とは腸脳発電でないである。

輪廻転生があるならば魂はいずこにありや。魂とは靈魂とは幽冥界にあるのではない。場の本体のことだ。人間は宇宙や時空を、行ったり来たり戻ったりしている。場の本体が介入すれば力の特性を相殺してまた力の物理的制約から解き放ち、力に実体として戻すことも出来る。イメージした物を場を経由して力に実体として取り出す事も出来る。

地球の時空の特性は極めて自由度の容量が大きいことである。宇宙文明では、各惑星の代表は自分たちの星の無力線を話題にし「うちの星ではこうなんだが」というと「おおそうですか。私のところではこうですよ」というと「なるほど、そう言うのもありますか」と言つて「ではこうしてみましよう」とか「ああしてみましよう」とか言っている。それは各惑星の場の原型を模索しているのだ。時空文明を考慮するのが宇宙文明であるということだ。地球の時空文明を考慮しなければ地球は宇宙文明に育たない。

自由度が高く容量が大きいことが臨界相転移を実現する。場と力が融合するには氷が水になつたり水が水蒸気になつたりするように力が相転移を起こす必要がある。力が自身で臨界を達成し、力自身で相転移を起こすには、実在する無限よりも実在する無限に相似して無限よりも無限に似ていれば、共鳴が共鳴を呼んで臨界に達する。場よりも本来あるべき姿に力が成るには、力で強固な鑄型を作るしかない。力で理想の鑄型を作るには力の容量が大きいほどこい。そしてより豊かにより精密に鑄型を作るには創意工夫が必要だ。

創意工夫のためには自由な発想が必要だ。力で場を考慮し創意工夫するためには自由度が高く容量の大きい鑄型を作るしかない。そのためには自由度が高く容量の大きい惑星が愛の臨界相転移の型をだす。惑星地球の持つ自由度が高く容量の大きい特性は愛の臨界相転移を起こすだけの容量がある。地球での出来事は創意工夫のための試行錯誤であると考えれば地球でのすべての出来事は無駄ではなかつたことになる。

地球が場力共鳴を巨大天災や巨大人災で破滅させない限り、場力共鳴で誤差は修正可能である。地球が場力共鳴を成しえたら臨界相転移である。地球人の中にも愛の臨界相転移に気付いた人々がいて功德を積んできた。その実績は実在する無限からの整合性を甘味してきた。

2	2	2	
0	0	0	
1	1	1	
1	0	0	
年	年	年	
1	5	4	
月	月	月	
2	5	1	
3	日	0	
日		日	
修	修	作	
正	正	成	

後記